

---

# 硝子の薔薇

クロネコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

硝子の薔薇

### 【Zコード】

Z3494M

### 【作者名】

クロネコ

### 【あらすじ】

王妃・ミリアム様付きの侍女の「ローズ」は、記憶喪失。

どこの誰なのかもわからなければ、戻るべき居場所も覚えていない。怪しさ満点の彼女だけど、王妃様は、彼女のが大好き。

物語の展開に連れて、「ローズ」の正体や運命が明らかになっていくミステリー風味のファンタジー。

## 登場人物（前書き）

少しづつ更新していきます。

## 登場人物

### ＜ローズ＞

記憶を失った状態で 王宮で保護された。  
最初は、死刑宣告を受けたが 王妃ミリアムの計らいで 侍女として召し上げられる。

胸に薔薇の痣を持つ。

最初は、周りから疑いの視線が絶えなかつたが 現在は、可愛がられているらしい。

髪の色は、純粹な漆黒で 瞳の色は、エメラルド色。  
ふつくらとしたウェーブが掛かっているが 仕事中は、いつも三つ編みにしている。

### ユウリイ

＜ローズ＞が発見された王宮を守る若き王。  
少しヘタレな面もあるが 臣下達をちゃんとまとめられるだけの心の強さを持つ。

決断力の強さは、誰にも負けない。

赤みの掛かった金髪が 少しだけフワフワとした癖毛で 優しげな灰色の瞳を持っている。。

### ミリアム

#### ユウリイの王妃。

我侭で 周りを巻き込む傾向があるが 剣術や話術が素晴らしい。  
夫であるユウリイ王の真名を守る故 刺客に常に狙われる日々。  
ストレートの黒髪で いつも三つ編みを纏め上げられている。  
王妃になる前に 年の離れた兄を亡くしているらしい。

### ナディア

コウリイの妹。

王位継承権は、放棄し 現在は、王宮付きの女医をしている。  
トッド相手だと 感情的になってしまつ。

髪の色と瞳の色は、兄と同じく 髪の毛は、肩の辺りで綺麗サッパ  
リ。

王位は、返上されたが 相当な美貌の為 未だに縁談は、続いて  
いちらしい。

宰相

コウリイの懐刀。

無口で寡黙だが 影ながら 周りに気を配つてゐる。

眼鏡を取ると 不思議な力を發揮。

コウリイとナディアとは、乳母兄弟の仲。

艶やかな青みの掛かつた銀髪をしており 瞳の色は、紅色だが 眼  
鏡を外すと虹色に。

顔色は、いつも顔に掛かる前髪によって 滅多にお目に掛かれない。

コーネリア

宰相の妹で コウリイの第一騎士。

任務中は、男勝りだが プライベートになれば 女らしい趣味に  
浸る。

コウリイとナディアとは、乳母兄弟の仲。

艶やかな青みの掛かつた銀髪をしており 瞳の色は、紅色。

顔色は、いつも顔に掛かる前髪によって 滅多にお目に掛かれない。

イリア

元は、流れの傭兵で 現在は、コウリイの第一騎士。

ひょうひょうとした口調で 主に對しても 口が軽いが そのも

たらす情報は、役立つ。

朱色の髪を短髪にしており 瞳の色は、黒。

王の命により <影>という秘密裏の特殊部隊の長を務めている。

## リーン

宰相の妻で ミリアム付きの侍女。

おつとりとした女性で 息子と夫に献身的。

侍女に扮して王妃を守る特殊部隊の隊員。

元は、親族が王族を狙つた刺客だつた為 家族を失った存在。

その後は、王族を守る為だけに 武術を習い 王妃直属の駒になつた。

見事な金髪の持ち主で 瞳の色は、藍。

## シャーリー

リーンとは、従姉妹同士のミリアム付きの侍女。

人をからかう事は、多いが ごく稀に 事実も話す。

侍女に扮して王妃を守る特殊部隊の隊員。

元は、親族が王族を狙つた刺客だつた為 家族を失った存在。

その後は、王族を守る為だけに 武術を習い 王妃直属の駒になつた。

美しいプラチナブロンドの髪で 瞳の色は、藍。

## ミイナ

ミリアム付きの侍女だが 現在は、妊娠中の為 自宅療養中。

表情は、掴めないが 夫には、メロメロらしい。

侍女に扮して王妃を守る特殊部隊の隊員。

元は、親族が王族を狙つた刺客だつた為 家族を失った存在。

その後は、王族を守る為だけに 武術を習い 王妃直属の駒になつた。

愛らしい栗毛の巻き毛の持ち主で 瞳の色は、黄緑。

ルチア

王宮の働き手をまとめる侍女頭。

元は、ユウリイの母親付きの侍女だったらしく 王妃達の教育係でもある。

特殊部隊の存在は、知らない。

白髪で、髪の毛は、いつ何時に見ても 綺麗にセットされ 瞳の色は、濃い灰色。

アナスタシア

王宮付きの侍女。

実は、ルチアの姪っ子に当たる。

両親は、先の戦争で犠牲となってしまったらしい。

赤毛を縦ロールにしており 瞳の色は、大陸では珍しい黒。

シャルロッテ

「ローズ」が召し上げられる前後に入ってきた侍女。

噂好きで いつも王宮内を走り回っている。

馬鹿力で 者を何でも破壊してしまうが 黙つていれば美少女。実は、元・刺客で任務失敗したが 敵の情報を話す事を条件に命を助けられた。

現在は、イリアの「影」として 王宮の不穏を取り除いている。艶のある艶色の髪色で 瞳の色は、黒。

コルネオ

宰相とリーンの息子。

少し消極的な性格だが 耳がいい。

セレディー皇子を天敵としている。

母の髪色と瞳の色を受け継いで とても愛らしい男の子。

アーロン

ミコアムの兄。

国を救う為に 自らを犠牲にした英雄。

「ローズ」と似ている。

セレディー皇子

ある事情から 幾度に渡つて 滞在している悪戯好きな皇子。  
毎度 様々な嫌がらせをするので 王宮の皆からは、避けられて  
いる。

「ローズ」に心を開いていく。

実は、とても思慮深く 異母兄弟であるガルディー皇子が、王位  
につくべきだと考えているらしい。

父王の真名を 意図せずに母から受け継いだ事で 刺客に狙われる  
身。

綺麗な金髪に 碧眼の持ち主。

トッド

セレディー皇子付きの騎士。

元は、イリアと同じくこの国に流れてきた傭兵だったが 国の危  
機に姿を消していた。

その後は、どういう経緯なのか語らず セレディー皇子の生母で  
ある前・王妃の配慮により 国民として受け入れられ その後は、  
皇子の騎士となつたらしい。

腰に掛かる銀髪で キリリとした眼差しに 柚榴色の瞳を持つ。

## 始まり

この国は、一度他国に滅ぼされようとした

誰の手にも それは、明らかことであり 避けられないと思われた

誰もが認める王は、侵略者の手に討たれ 誰もが慕う王妃は、生きていくのも辛い日々を送るだろうと

けれど 奇跡は、起きた

それは、偶然の出来事だったのだろうか？

この時 始めて戦争に身を投じていた皇子に忠誠を誓っていた若き騎士が、自らを犠牲にした

我が身を国に眠りし土地が身を差し出し 国は救われた

国は、その騎士の犠牲を糧にして 残った力と新たに得た力を振り翳し 敵国を滅ぼした

血を犠牲にした騎士の血筋は、その栄誉を讃えられた

そして 月日は、流れる。

幼かつた皇子は、成長し 死んだ騎士の妹を妃に迎えた。

侍女としての1日は、主よりも先に起床し、すぐにその支度を整えられるように準備万端にすることからだった。

どんな要望に応えられるよう、衣服も宝石もアクセサリーも……。

全てを用意しなければならない。

といつても、今仕えているお方は、ご自分をあまり着飾らつといが。

けれど、何も身に付けなくとも、その美しさは、誰もが溜息をつくと思ひ。

それは、他の侍女仲間も同意見。

当の本人にそれを言えば、大笑いしてしまわれるだろうけれどね？

{

{

{

{

「//コアム様…………朝ですよ？」

「起きてください」

主である//コアムを起す役割は、いつの間にか この侍女の仕事になっていた。

「//コアム様 早く起きてください」

その言葉にてベッドの中へ躊躇つて居る影は、少しずつ起き上がってく。

「……………♪ローズ♪…………もつ少し寝かせて頂戴？」

「陛下は…………もへ、起きてしまったのかしら？」

童顔なお顔を布団から少し出して //コアムは、伸びをした。

「陛下でしたら 30分ほど前に部屋を後になりました。

仲が良のこことは、国にひととも素晴らしいですが  もつ少し体力をつかましょつね？」

「ローズ」は、ニッコリと微笑んで、主の首元を指差す。

扉の前には、顔を真っ赤にさせている侍女2人が。

ミリアムは、首を傾げ、フラフラと壁にある鏡に姿を晒すと、思わず悲鳴を上げてしまう。

「陛下……前に止めて欲しいと申し上げたのにッ！」

普段は、弱気なくせり……！

パニックになつて、いる主に、「ローズ」は、微笑ましそうに見つめている。

これが、いつもの一日の日常の第一歩。

## 口語（後書き）

「ローズ」とは、誰でしょうか？

## お茶会ー（前書き）

リード やつと記憶喪失の侍女の存在がちゃんと明らかに

名前の由来は、彼女の胸の痣です。

「△ローズ△……この頃 田舎にも慣れてきたかしら？」

貴女がわたくしの侍女になつてから 大分経つたけれど

ミリアムは、紅茶を啜りながら 全員分のコップに飲み物を注いでいる少女に声を掛けた。

皆は、少し大きめのテーブルに腰を下ろし 侍女達もこの時ばかりは、少し質素な椅子を持参して このお茶会に参加している。

毎回お茶を披露するホステスは、前もつて自らのセンスを生かし密に安らぎを『える』こと。

これが、このお茶会の絶対のルールだ。

今日のホステス役は、侍女の中で新米の黒髪の少女・△ローズ△。

彼女は、数週間前に突如現れ 意識を数週間も戻らず 田が覚めた時には、全ての記憶を失つてしまっていた。

治療に当たった医者の話によれば 胸の心臓のある部位には薔薇を象った痣が。

名前が無ければ 呼ぶのも大変だということで 今現在 ハロー<sup>ズ</sup>と呼ばれている。

侍女として他の使用人達に紹介された時は、色々と疑われることも多かつたが 今では、他の皆から可愛がられる存在に。

それは、王宮で働く最年少だからかもしれない。

記憶を失っている為に 実年齢は、定かではないにしても 見た目は、13・4歳なのだから。

「大丈夫です、ミリアム様ッ！」

最初は、失敗も多かつたかもしませんけど この頃は、ルチアさんは叱られるのも減つてきたんですよ？

以前は、10分間に4・5回失敗していましたけど 今は、1時間に2・3回くらいに減りましたから

「あら 油断は、大敵よ？」

わたくし何か……子供の頃から 今と変わらないくらい説教されてばかりだったのだから。

特に お兄様と一緒に街に押し入ってきた盜賊を追つ払つたのは、拙かつたかもしないけれどね？

それを聞いて ベローズは、驚いたように目を大きく見開く。

「ミコアム様は、本当に子供の頃から今と同じだったんですね？」

わたしが侍女になる前にも 他の方々の反対を押し切つて 自ら軍を引いて、討伐なさつたそうじゃありませんか

その発言に 聞いている皆は、苦笑気味。

侍女仲間達は、どうしたらいいのかわかつていながら 王とそのお付の面々は、完全に完全に笑つてしまつていた。

ただ笑つていなるのは、言われた当の本人だけ。

「ベローズ……貴女、言つよくなつたわね？」

少し拗ねた顔は、年上なのに 可愛いと思つてしまつた。

「//コアム様に侍女にして頂いて 心より感謝しております。

それから 陛下の心遣いにも。

お2人のお陰で わたしは、今の日々がとても充実しているのです

満面の笑みを浮かべて話すくローズへに 王と王妃は、嬉しそうに顔を見合わせる。

「それなら いいのだけど…………？」

シャーリーに聞いたけれど 宰相に嫌がりせられたんでしょう？」

ミリアムの言葉に 陛下の向かい側に座っている眼鏡を掛けた長身の男が、咳払いを一つ。

彼は、陛下の懐剣とも呼ぶべき存在らしい。

名前は、宰相の名を引き継いだ時点で 後継ぎとなるべき生まれたばかりの息子に与えたとか。

滅多に笑わない方だから ちょっと睨みを効かされると 陛下でも言葉を失つてしまつまむ。

ただ奥さんで ミリアム様の侍女をしている愛らしいリーンさんと  
幼少の頃から知っているルチアさんには、効かないらしいけど。

後 陛下の騎士様も 待つたく気にせず、スルーするはす。

「滅相も在りませんッ！」

宰相閣下は、迷いそうになっていたわたしを、案内して下さったんですね。

その後は、『子息のネオ坊ちやまのお相手を休憩時間にさせて頂いたんですね』

「ローズ」は、嬉しそうに 最後に自分用の紅茶を飲む。

「本当に助かっているんですよ?」

「ローズ」は、働き者だし……「うひの子供達とともに仲が良いんですね。」

悪戯三昧のネオが、あんなにも懐いているだなんて…… 素晴らしい事です」

ちやつかり宰相閣下の隣りに座つて和んでいるのは、奥方のリーンさん。

外見は、とつても可愛らしいお人形さんだけど 怒るヒルチアさんには冷や汗を出させてしまつらしい。

♪ローズくが王宮で捕まつていた頃は、産後休暇で暇を貰つていたらしく 少しして復帰した。

まだ仕事に慣れずに 泣いてばかりいた♪ローズくの良き相談相手でもある。

その隣りに座つているのは、シャーリーさん。

最初2人が並んだ時は、双子かと思つていたけれど シャーリーさんとリーンさんは、従姉妹同士らしい。

プラチナブロンドのシャーリーと違つて リーンは、綺麗な金髪の持ち主。

「侍女として慣れてきた事は、良いかもしませんけど 記憶の方は、全く戻らないの？」

シャーリーは、優雅に紅茶を飲むと、テーブルの上に静かに置く。

その言葉に、ローズは、申し訳なさそうに首を振った。

「ナデイア様にも、顔を合わせますと、同じように聞かれることすけどね？」

それに、わたしとしては、気になることじがあり……

その発言に、陛下に剣の誓いを立てている女騎士のコーネリア様は、眉間に皺を寄せた。

「せういえば殿下がおつしゃられていましたね？」

痣が、日に日に濃くなつてきて……

その話を聞いて、ミリアムも陛下も、心配そうな表情になつた。

「大丈夫ですよ……」

痣が濃くなるのは、ちょっと気になりますけど……体調が悪くなつて、いるわけでもないんですから」

^ ローズくは、自身あり氣に胸を思い切り叩く。

けれど あまり強く叩きすぎたのか 思い切り咽込んだ。

## お茶会2（前書き）

会話の中で 王と王妃の周りの人々の説明入ります。

「前から思つておりましたが、  
「ローズ」を見ていろと……あ  
いつを思い出すんです。

何でいつか 性格ですかね？」

宰相閣下は、突然 眩いた。

その発言に 皆が、ハツとしたように 顔を見合わせる。

「確かに 似ているかもしませんね？」

宰相のあじらいの方も……」

「ミコアムの話していた通り 瞳の色もさうだからな？」

声と同時に ミコアムと陛下が、顔を覗き込んでいた。

2人の美しい顔が、至近距離にあるので 顔を真っ赤にさせてし  
まつ。

その反応が、楽しいのか 王妃は、楽しそう”可愛い～”に思い切り抱きしめてくる。

「ローズ」は、あまりに突然のことなので、窒息しそう。

陛下は、さすがにそれは描いと思い、ただ羨ましそうに見つめているだけ。

侍女頭のルチアは、その行動に深く溜息をついてしまっているけれど……。

「ゴカリイー…………羨ましいんでしょう？」

子供の頃は、可愛い物を抱きしめるのが、趣味だったんですねの」

コーネリアは、宰相の双子の妹で、同じ顔なのに、性格は、まるで正反対。

主に対する発言では、許されない事かもしれないけれど、やはり幼い頃からの友人だからかもしれない。

「リア…………俺は、お前の主だぞ？」

しかも　君主に對して　その言ひ方は……

「お茶会の最中は、主従関係なく接するよう」と言つ出したのは、あなたではありませんでしたか？」

その言葉に、王は、言葉を詰まらせてしまつて、

「そうでしたねえ～？」

俺達は、元より、陛下をお守りする騎士として、接するつもりだったのに、それに対し、不機嫌になつてしまつたんですから。

俺も、最初は、こんな我慢で良いのか？！って思いましたけど……  
今は、慣れました」

ケタケタと大爆笑しているのは、第一騎士のイリア様。

この国では、珍しい髪の色で、元々は、流れの剣客だったところ

その剣術の実力を認められて、騎士の称号を与えられたとか。

奥方のミイナさんは、現在妊娠中で、ミリアム様付きの侍女の仕事をお休みしているらしい。

子供が生まれて、少し時間を置いてから 復帰する事が決まっている。

王宮には、子供がいても安心して働けるよう 子供の面倒を見る空間が設けられていた。

そこでは、戦争などで 子供を亡くしたり 親を無くし、働きようがない子達が役割を果たしているそうだ。

隣国や他国からは、非道な手段で戦争に勝利していると恐怖されているらしいけれど くローズから見ると とても素晴らしい国だと思つ。

全く記憶がないのだから 他がどんなものかは、全くわからない。

けれど 人として ここにいる人々は、素晴らしいだった。

特に このお茶会に集まっている人々は、本当に王と王妃に信頼された人ばかり。

だからこそ くローズ>にとつては、すく居心地が悪かった。

自分が、この場について良いのかわからないのだから。

「どうかしたの、△ローズ△？」

わざわざから 黙ってしまっているようだけれど

リーンの言葉に △ローズ△は、ハッとしたように顔を上げる。

その声に 他の誰も、心配そうにしていらっしゃる。

「すいません、ちょっと考え方をしていました。

わたし何かが、お茶会に参加していくものいのかと……

その発言に ミリアムが”そんな事ないわ?!”と、声を張り上げた。

「わたくし 貴女の事大好きよ?」

初めて会った時にも、言つたけれど 貴女の声は、亡くなつたお母様の歌声にソックリなの。

それに 貴女の右の瞳の色が、お兄様と瓜二つのよ……

ミリアムの顔は、よく見えない。

最初に抱きしめられたままの状態なのだから。

他の人々に視線を向けてみると 何だか、哀しそうな表情になつて  
いる。

宰相閣下が、最初に自分と重ねていたのも 実は、ミリアム様の兄  
上だとか。

そういうば 前に、他の下働きの子達の噂話を小耳に挟んだ事があ  
つた。

王妃様の兄君は、國の為に犠牲になつた英雄らしい  
と。

この方々は、今の自分達が平和に暮らしていることで その方に罪  
悪感を抱いているのだろうか？

## お茶会

「あ、お茶会をしてくると向って 来たのに。

何だか 重苦しい空気ですね？」

その声に 驚いて振り返つてみると そこには、陛下と同じ赤毛の混じった金髪を肩の辺りで切り揃えた女性が。

彼女は、陛下の妹君のナディア王妹殿下。

それは、顔立ちと髪の色で 一目瞭然だろ？。

ナディア様は、数々あつた縁談を全て断り 医術の道へと足を踏み入れた異例の王族。

けれど その腕前は、確かにあるはず。

特に 王宮で働いている女性陣には、とても素晴らしい存在でもある。

いへり医者といえども 男性医師に診断してもひうのは、気が引

けでしょつのだから。

「ローズ」も、胸にある痣の経過を診察しても、いつ時、男に見られるのは、恥ずかしくて堪らない。

「ナディア様………今田の診察は、終わったのですか？」

「ローズ」は、今日のお茶会のホステスである立場を思い出して急ぎ、コップと紅茶を用意する為に立ち上がった。

「珍しいな、ナディア。

「ワーカーホリック仕事中毒のお前が、お茶会に参加するだなんて」

「ウリイは、珍しい物を見たとでもこいつよつて、田をパチクリさせている。

その反応は、騎士達と宰相も同じだらう。

「あら、いじ存知ない？」

「ナディアは、『ローズ』がホステスの時だけ、毎回、お茶会に参加しているのよ？」

ミコアムは、楽しそうに微笑む。

侍女達は、王の妹であるナデイアの出現に 全く動転することなく  
優雅に席を空けた。

「毎回、ローズがお茶会のホステスになる時は、陛下達 お仕  
事でお越しになられませんでしたから。

確か 今回が初めてでは?

ルチアの言葉に 陛下方は、納得したように 顔を見合わせている。

「驚いたな~?

まあ ナデイア様自身が、ローズの主治医になる事を宣言な  
さつたから 何かと思いつ入れがあるとは思つていましたけど……  
れ?

だって、ソックリじやん

イリアは、感心したように 顎を摩つた。

騎士の一言で、その場が凍りつく。

皆のそんな反応に、<ローズ>は、疑問を覚える。

けれど、その質問をする前に、彼は、宰相に蹴りを入れられてしまっていた。

今は、一線から退いているけれど、剣術も体術も相当の腕前らしいから、イリス様は、相当辛そうだ。

その一撃が、氷河のような氷に<sup>ひび</sup>輝を入れたらしい。

「ナディア様は、お砂糖が2個でしたね？」

<ローズ>が、そう言つと、彼女は”ええ”と、頷く。

そして、丁寧な手つきで「ップを差し出す。

「あつがとつ。

うん、やっぱり、<ローズ>の入れる紅茶は、絶妙ね？

仕事の疲れが取れる「

「ナデイアと微笑むナデイアに、クローズも自然と笑みが浮かぶ。

「ナデイア……本当に疲れているのね？」

「何か問題でも、出でてきているの？」

ミリアムは、神妙な表情を浮かべて、隣に座っている義妹の顔を覗き込む。

ルチアは、そんな王妃の行動に注意しかけたが、確かに顔色が悪いと気が付いていたのか、思い留まる。

「ああ～例の国から、使者が来たでしょ～？」

「内部紛争が起きるかもしれないから、皇子を保護して欲しいって」

ナデイアは、そう言つと、深く溜息をついた。

その様子を見て、陛下や宰相達も、同情するような顔になつてゐる。

ミコアムや王妃も、何か思い当たる事があるのか 溜息。

そんな皆の反応に <ローズ>は、1人だけ首を傾げるしかない。

「仕方がないだろ、ナディア。

皇子は、お前の事を本当に慕っているんだから

ユウリイ陛下は、苦笑して 妹殿下の背中を優しく叩く。

「わかつています、そりゃあーもうシ一

けれど 限度つてものがあることを、兄上達にもわかつて頂きた  
い

少し膨れた顔は、やはり陛下の愛された妹だと思つ。

「ナディア様？」

その異国の皇子様のお世話を、そんなに苦痛なのなら わたしが代わりましょうか？」

「ローズ」は、あまりに氣の毒なような氣がしてきて 提案した。

その発言に その場にいる人々は、呆気に取られてしまつたらしい。

先ほどまで 心から嘆いていたみづみしか見えなかつた女性も、目をパチクリ。

「×ローズ×……貴女、自分が何を言つてゐるのかわかつていて？」

その皇子が、どんな性格をしているのか 知らないでしょ？」

「話だけは、伺つた事があります。

御年10歳の聰明な皇子なのでしょ？」

とても礼儀正しいと小耳に挟みましたけど……」

「ローズ」の仕入れてきた内容に、皆は、困り顔。

それは、違った情報だったのだろうか？

「うーん……そつちの情報は、こつちが預かる事になつてゐる同じ年の皇子。

今的内容の皇子は、側室の息子で　問題の皇子は、正妃の息子」

「その国の王妃様は、ミコアム様とご友人なんですよ。

ですから　交流は、続いていたのですが……その方が、2年前に病で亡くなられてしまつたんです。

王妃様が亡くなられた事で　その国の王は、側室の方に王妃の位をお与えになりました。

これにより　王位継承第1位の皇子は、何の後ろ盾もなくなつたに等しくなつたそうです。

皇子の母君の実家は、既に皇子の従兄が後を引き継いでいたそうですが　若輩者ですし。

ですから　時より、いぢりに滞在する事がありまして……

ルチアは、頭痛を覚えているかのようご 説明してくれた。

「もしかして 新しい王妃様に、苛め倒されているんですか？」

だから、この国に逃げて……」

「ローズ」の言葉に、皆は、目を泳がせてしまう。

「いえ その逆です。

押し付けられたんですよ……」

驚いて、振り返ってみると、宰相が、真剣な顔になっていた。

小刻みに震えているのは、怒りによるものなのかもしれない。

「宰相閣下が、一番の犠牲者でしたからねえー？」

前回お越しになつた時は、一番凄かった……」

イリアが、そう呟くと 宰相閣下の鉄拳が、炸裂した。

「主人もそうですけど……」つかの息子は、子分扱いをされています  
しね？」

あの子……皇子が滞在中、食欲が減ってしまうんですね

奥方の悩みの種に 困り果ててしまつてござるらしー。

「ミーナも 生まれたばかりの子供が、同じ扱いを受けるのではな  
いか と不安がつていますし」

イリアも タスクがに、不安が込み上げてきたのか 肩を竦めてし  
まつてている

「我々侍女も、悪戯の標的にされることもありました。

ルチアさんでも 何度も雷を落とされましたけど 意味が為さず。

ただナディア様に対しては、随分と紳士的なんですよね？

だから 每年、皇子のお皿付け役になつてしまわれて」

リーンは、溜息をつきながら テーブルに頃垂れている王妹殿下に  
視線を注ぐ。

話しを振られたナーティアは、機嫌が悪い。

「あの腹黒い性格が、直っているのならば、綺麗な顔をした異国の皇子なのに……ッ！」

前回の犠牲者は、宰相だけじゃないんだからーーー！」

「ああ…………そういえば、折角用意していた薬剤を全部粉砕されたのよね？」

しかも、それによつて、皇子自身も薬の影響を受けてしまつて暗殺容疑を掛けられて、一晩だけ牢屋に入れられてしまつて

ミリアムの言葉に、王は、その時の事を思い出したのか、あの時は、すまなかつた”と、頭を下げる。

兄の言葉に、妹は、首を振つた。

「気になさらないので。

アレは、立場上…………仕方のない判断だつた事は、重々承知しているわ？

皇子の騎士が、私を斬り捨てようとしていたところを、何とか牢獄

行きで収めてくださったのだし。

それで その限られた時間の間で リアとイリアが、皇子の悪戯による結果だという証拠を見つけてくれたし

そう言いながら ナディアは、コーネリアとイリアに視線を向ける。

視線を受けて 2人の騎士は、急いで地面に膝を付いて 頭を下げるらしい。

「ですから ナディア様？」

わたしが、その皇子様のお世話を代わります

「ローズ」は、最初よりも自信満々に声を張り上げた。

一同は、先ほどの会話を聞いても 全く意思が揺るいでいない侍女に 呆気だ。

「本当にいいの？」

王妃の問いかけに 「ローズ」は、満面の笑み。

「 な、り、ば、  
誓、い、を、立、て、ま、し、ょう、う、か、? 」

ちょっと、企みがある「ローズ」です。

訪問に向けた（前書き）

## 訪問に向けて

王宮は、緊張に包み込まれていた。

どんなに厄介な相手でも 受け入れる。

それが、先帝夫婦のルールであった為 その跡継ぎであるコウリイ王も従っているらしい。

勿論 地下に忠誠を誓っている王宮の人々も。

毎回毎回、悪戯されてしまうので それに対する対処も、厳重になつてきているとか。

旗から見れば、条約を結ぶ前の敵国が、訪問するに当たる準備を行つていいかのよう。

そこまで念入りにするべきなのか……と、リーンに聞いてみたところ これだけでも足りないと返された。

みんなは、じりじり 自分が考えた提案が成功するとは、信じら

れないようだ。

{} {} {} {}

「王宮内では、もう準備でてんてこ舞いです。

ルチアさんは、わたしを含めた侍女のみんなを懸命に挨拶教育をやり直しています。

宰相閣下は、絶対に駄目にしてはいけない書類などに保護の呪文などを施しているんですよ？

それに 万が一の事を考えて お子様方のお部屋には、特殊な印を施して 部外者には、その部屋を認識できないようにすることが決定したそうです。

ネルつてば  
それを聞いて  
本当にホツとしていたんですよ？

本当にその皇子様の事を、恐れでいるようでした

「〈ローズ〉？」

今からでも遅くないわ？

皇子のお世話役は、私が……………「大丈夫ですよ」

「先日のお茶会でも申し上げましたでしょう？」

話を聞いている限り　　その皇子様は、お寂しいんでしょうか？

だから　皆さんに構つて欲しいんですよ」

「ローズ」は、丸椅子に座つて　ニッコリと微笑んだ。

そんな少女の言葉に　田の前に座つて　いる女性は、不安そうな顔になつていた。

今　のナディアは、この國の王妹殿下のナディア姫ではなく　王専属の女医として　存在している。

王位継承の証を返上しても　　その美しさに惹かれる男性は、後を絶たないらしい。

まあ　それは、王に剣の誓いを行つたコーネリア嬢も同じうじいけれど。

「まあ　貴女の事を信用していないわけじゃないわ？」

だけど　心配なのよ。

特に……皇子と一緒にくつついてくる騎士が、特に　血の氣が多

くて

「ああ ナディア様は、危うくその方に斬り捨てられるところだつたんですよね？」

それに ミリアム様に窺つたんですけど その方といつも喧嘩なさつていろとか」

「ローズ」の言葉に ナディアは、険しい顔。

「あの男は、昔からそなんですよ。

それで ここの国が危機に瀕したら 真っ先に他国へ逃げ出してしまった。

いくら 流れてきた傭兵だからって たった1人の主に忠誠を誓う騎士じやないからって……あの男は、子の国を見捨てたの。

なのに 次に現れた時は、あの問題皇子の騎士様……。

初めての訪問の時、みんな言葉が出なかつたわ？」

同じように流れてきたのに ちゃんとここの国に留まつて いるイリアとは、大違い」

その話を聞いて 「ローズ」は、黙つたまま。

何を言つても 意味がないような気がしたから。

そして 少し時間を置いてから 「ローズ」は、こじりとばかりに満面の笑みを浮かべた。

「皇子様のお世話役もその方への配慮も わたしにお任せ下さい。  
粗相のないよう 務めさせて頂きますから」

そして 皇子が訪問する日を迎えた。

## 訪問1（前書き）

問題皇子と厄介騎士の登場です。

## 訪問1

皇子一行が到着したのは、提示された時間よりも30分ほど早かつた。

その事には、王宮中が大騒ぎ。

少し時間が空いたと油断した矢先に 皇子が到着したという連絡が門番の放つた使役により発覚したのだから。

ちょうどお茶会を短縮版で始めようとしていた「ローズ」達も、大慌て。

特に お世話役が変更されたという連絡は、3日前に文を送つて昨日、承諾の返事が着たばかりなのだから 「ローズ」は、王と王妃や他の侍女に背中を押されて 真っ先に門まで駆け出した。

皇子が王や王妃と謁見するのは、王の間と決まっているらしい。

それ以外の場で会つという行為は、少し特例で 酷い場合は、暗殺目的と疑われても仕方がないとか。

「ローズ」は、いつも侍女服と違つて 少し礼服に近いワンピースに身を包んでいる。

皇子に対しても、新米の侍女が世話役になつたと知られれば 友好問題に発展する可能性があるかららしい。

なので、皇子滞在中の「ローズ」の身分は、礼儀見習い中の貴族の令嬢。

つまり、お客様扱いをされることが、王宮内の決定になつていて。

本当に、皇子には、色々と迷惑を掛けられたのか 死刑宣告までされたはずの新参者の侍女をお嬢様扱いする事は、苦痛にも思わないらしい。

逆に、可愛いとすれ違つて呼ばれるので、こちが恥ずかしくなつてしまつ。

やつらがいる内に、「ローズ」は、王宮の門に辿り着いた。

門番は、何か困つたように、長身の男を制しているらしい。

「ローズ」は、不思議そうに背伸びする。

門番のハンスさんは、困ったように その男の人を止めていた。

少し碎けた口調だから もしかしたら 知り合いなのかもしれない。

彼は、陛下の第一騎士のイリアさんと同じ頃に流れてきた傭兵らしいけれど……。

皇子様が、どこかで待っているのに 無様な姿を見せるわけにはいかないのだろう。

長身の男の人は、腰まで伸びる銀髪を一つに纏めて 風に揺らいでいる。

「お前 そんなところで何をしている?」

突然声を掛けられて 「ローズ」は、思わず小さな悲鳴を上げて飛び上がってしまった。

門番も、その声に気が付いて 駆け寄ってきたらしい。

勿論 長身の男の人も一緒に。

「お前……もしかして、僕のお世話役の女か？」

呆気に取られていると 先ほど声を掛けってきた声が、また聞こえてくる。

けれど 辺りを見回してみると どこにもその声の元がない。

すると 門番が、顔を真っ青にさせている姿と長身の男の無表情の中の驚愕が見て取れた。

「下だ」

不機嫌そうな声にハッとして ルーズは、地面の方に目を向ける。

すると 視線の先には、ふんぞり返っている礼服に身を包んだ少年が。

「ふんッ！」

まさか こんな失礼なガキが、僕の世話係になるだなんて この国も墮ちたものだな？」「

あまりにもの毒舌に ハーローズは、目をパチクリ。

見た目は、金髪で蒼い目の天使のような姿なのに ここまで口が悪いだなんて……。

「通りで 皆さんが、嫌がるわけだ。」

「こんなに性格が悪いんじや みんな迷惑だろつから」

口に出してしまってから ハーローズは、ハッとして 口を押さえた。

けれど 目の前には、顔を引き攣らせている皇子と呆気に取られている門番と目を細めた長身の男性。

「お前…………」の國の者じゃないだろ？

この國では、相手に対する礼儀を重んじている。

なのに　お前は、堂々と侮辱してくれた

「じこが殺氣の籠つた口調に　「ローズ」は、頭の中で次の言葉を  
搜す。

言い訳を考へるべきではない。

多分、……「」の皇子に必要なのは、そんな見え透いた嘘ではないはずだから。

「皇子様は、口下手ですね？」

悪戯する」とで　西わんが、自分を見てくれるよひになさつたいの  
でしょ？

そんな事よりも　もつと簡単なことがあるのですが　一緒に実行  
してみませんか？」

「うーん」とやつぱりと　皇子は、呆然と口を半分だけ開けたまま。

「勿論…………えつと皇子の騎士様ですよね？」

貴方にも「」協力を仰ぎたいのですが…………宜しいでしょうか？」

銀髪の男性も 急に話を振られて 呆気に取られてしまっている  
らしい。

ハンスは、何をやるつもりなのか気が付いていないようだが 口を開きかける。

けれど その前に満面の笑みを向けられてしまい 直立不動。

「ハンスさん…………」  
「…………」  
王の間に向かうのが少し遅れると使役を送つてもうりますか？

今から話す内容をそのまま……

「わたくしは、やつぱつ心配だわ？」

「ローズ」に皇子の世話を、重ねると細つての

「コトムは、不安ひとつも溜息をついた。

王妃の言葉に、コウリイも、心配そうな顔になつていて

「あの子は、少し不思議な空氣がありますからね？」

もしかしたら 皇子の事も何とかするのでは？」

「一ネリアは、一ツ口と微笑んで 言ひ。

「ですね？」

もしかしたら 堅物のトックも砕けるかもしないだらう。  
意外に惚れちゃつたりして～？」

イリアは、ニヤニヤしながら 呟いた。

「お前は、ナディア様のお心を知つていても そんなふざけた風に  
言えるのか？」

「ローズ」が現れた事で 少しは 落ち着きを取り戻してきたとい  
うのに

宰相の冷たい声が、放たれる。

その言葉に 第一騎士は、”わかっている”と、肩を竦めてしま  
う。

「ですが ミリアム様？」

「ローズ」ですが、あの子は、ビビッドのお嬢様なのは、間違いないと感じますよ？」

遊び心は、ちよつと問題かもしませんけれどね？」

ルチアは、静かに言った。

「皇子の世話を担当たって、他の侍女達と同じように礼儀作法の教育を行つたのですが、ちゃんと身に付いていましたので。あれだけ身についていましたら、他国に使者の侍女として同行しても、問題ありません」

「ルチアが、そこまで言つたなら、相當なんだね？」

「ローズ」は、記憶を一切失つていて、最初こそは、陥しまれることがあるかもしないけど、今では、随分と可愛がられているみたいだから」

王の言葉に、臣下達も頷き合ひつた。

ふと、そこへ、使役らしき使い魔が王の間に飛び込んできた。

「あら　それは、ハンスの使い魔ね？」

「一体　なんて書いてあるの？」

使役の持ってきた手紙を読んで　頭を抱えてしまっている夫に  
王妃は、首を傾げる。

「皇子とトッドと少し遊んでから　王の間に入るそりだ」

その内容に　その場にいる人々は、目を大きく見開いてしまつ。

「遊ぶつて……　あのトッドも一緒に？！」

「皇子なら未だしも……　絶対にありえませんつてッ！」

イリアは、大袈裟に大声で叫びながら　首を振つた。

「一ネリアも　田をパチクリさせながら　顔を引き攣らせている  
双子の兄に視線を注ぐ。

「だけど　もしかして、トッドも「ローズ」がお兄様に似ている  
と実感したのなら　ありえない話じやないと思つただけれど？」

だって 親友だったのですもの

ミコアムは、唸りながら 首を傾げる。

「といつよつ 挨拶を後回しにして 皇子と遊ぶわけですか……」

ルチアは、深く溜息をついた。

## 訪問2

「おい…… 一体、何を考えている?」

問題皇子事 セレーティー皇子は、眉間に皺を寄せて 呟いた。

騎士のトッドちゃんは、あまり害がないと判断してくれたのか 無言で付いてきている感じ。

「何 つい、最初に言いましたよ?」

皆さんに悪戯するみたいな回りくどいやつの方何かしなくても 仲良くなる方法があると

「ローズ」は、楽しそうに 微笑んでいた。

けれど その瞳には、相手に拒否権を「えない強さ」があった。

「お前…… 本当に何者なんだよ……。」

普通 他国への訪問の始まりは、王の間で王と王妃の謁見から始まって 挨拶を交わすものなんだぞ?」

セレティーは、もう諦めてしまつたらしく。

「ローズ」は、クスクスと笑つて “お前じやありません、  
ローズ”と、微笑む。

今度は、先ほどのよつなものではなく 心から笑つてゐる。

「ローズ」ね？

確かに棘がありそうだ。

華の美しさとは、違つて……

皇子の眩きに 少女は、納得がいかないかのよつて 膨れつ一面にな  
つた。

「別にそういう意味で名付けられたわけじゃありません。

名前を呼ぶのに 「名無しさん」じゃ面倒だから……つて

その眩きに 皇子と騎士様は、驚いた顔になる。

「 くち名無じへだつて？！」

名前は、普通 親に貰つだらう？

厄介者扱いされている僕だつて 父上に名前を預いたつていつのこ  
…………

「うへん…………わたし 実は、『記憶喪失なんです。

それで 怪しつつ、実を言つと 死刑宣告を受けたんですよ  
ね？」

今度の発言にも 絶句するお2人。

「でも ミコアム様…………王妃様の行動とその話をして下さつた陛下の「」配慮で、ここまで生き延びたんです。

「ローズ」とこいつ名前も ミコアム様が、命名して下さつたんですよ？

王宮の臣とも 色々なことを教えてくださいます」

「だから 厄介な皇子の世話役を貰つて出たのか？」

少し自虐気味な言葉に、「ローズ」は、"はい"と、正直に頷いた。

あまりに清々しく答えたので、セレーティー皇子は、吹き出してしまつているし、トッドさんも、肩が震えてしまつている。

もしかしたら、怒るのを通り越して、笑いが込み上げてきたのかも。

「「」の王宮で暮らすようになつてから、まだ間もないわたしですけど、皆さんが、とってもいい人だつてこと、痛いほどわかるんです。

けれど、皇子様方は、「ミュニケーションの取り方がわからないと、いうだけの理由で、引っ搔き回している。

だから、こんなわたしにも出来ることを考えてみた結果、互いの誤解を取り除く事なんぢゃないか、って考えたんですね。

自信満々に微笑む様子に、2人は、顔を見合せた。

「お2人は、言葉で表現する事が苦手なんぢゃないですか？」

皇子様は、「」自分に目を向けて欲しいから、何かと悪戯をする。

トッドさんの場合は、えつと……これは、第三者の方から聞いた

為 誤解もあるかもしないんですけどね？

この国が危機に瀕した時に 逃亡してしまったっていつ 罪悪感  
があるから 他人行儀になってしまって 厳しく受け取られてし  
まうんじゃないって」

その言葉に セレーティーとトシードは、何も答えない。

「だから わたしが、橋渡しをするんです。

結局 頑張るのは、貴方方ですか。

恥ずかしいから…… 何で、馬鹿な言い訳をしないで下さいね？

拒否権は、ありませんから。

今のわたしの発言が氣に入らなかつたのなら すぐにあっしゃつて  
下さい。

その代わり 一生、この国で和解することが出来なこという事を  
覚悟して頂かないとけませんけど」

「ローズ」は、何も反論が見られないのを確認して ゆっくりと歩  
き出した。

2人は、その後を無言で追いかけてくる。

というより 発言権を与えたのに あまりの言い方に言葉が見つからないのかかもしれない。

「ローズ」は、これから実行する計画を頭の中で見直しながらスキップ調になりながら 歩んでいく。

### 訪問3（前書き）

今回は、会話だけでいってみましょー！

「△ローズ△……これは、何だ？」

「だから ノーモア溢れるニューバージョンのセレーティー皇子様です。

とっても お似合いですよ？

顔立ちも、しつかりなさっていますから 何でもお似合いですか

「ひ

「おー……ッ！

何勝手に塗り付けているんだよー！」

「何……って？」

勿論 決まっているじゃないですか。

ここまでしたのに これをしなければ

何の意味もありません

「意味も何も 屈辱的だ……」

「大丈夫です、お似合いですもの。

記念写真　お撮りになれますか？」

「なッ！」

そんなの撮る訳無いだろ！？！

つて……何、取り出してきていいんだッ！

こっちに向けるんじゃない！…！」

「だから　記念ですよ。

今は、嫌かもしませんが　後から懐かしくなります。

多分　こいつ事が出来るのは、今のうちですから

「何が言いたいんだ？」

「あら………褒めているんですよ？」

そんな顔したら　台無になってしまいます」

「褒められても、全然嬉しくないッ！」

つていうか　トッシュはアリハしたんだよ……

僕が、こんな田に遭つてこねつてこの元　なんで、助けに来ない？」

「何言つてこるんですか…………！」

「え？」

…………お前　本当にトッシュなのか？」

「…………皇子…………」

「↙ローズ↘…………貴様、こつの間に？！」

とこりのよつ　何て、残酷なことを……」

「あら　皇子様もアリハすけど？」

トッシュ様もお似合いだと思いませんか？」

セレティー皇子様が、ここの中を何も知らずに田を輝かせている間に、変身していただいたんですね。

すつし、抵抗なさいましたけど 皇子様の為だと説得したところ 納得して頂きました」

「後は、皇子様の準備が整いましたら 挨拶回りに向かいますよ？」

「はあ？！」

この格好で 城の中を渡り歩けと？

笑い者にさせたいのか？！」

「勿論……皇子様とこうじとが、伏せておきます。

だって 齧さん、とつてもペコペコしていらっしゃるんですからね？

ですので トッシュ様も その事は、承知して頂けますよね？

この国では、あまりそういう事がありませんが 王族の方とこうのは、外聞を気にするのでしよう？

「といつよつ 知られたら、一生の恥だ。

トッシュの場合は、剣で自害しかねないぞ？

「こつは、根っからの堅物だからな？」

「でしたら お2人とも バレないよつに頑張ってください。

王の間にま、ちやんと終わつてから向かいますから……」

「まさかとは、思ひが その時は……」

「えすがに その時は、元の姿ですよ。

それで 滞在中の間 2つの姿を使い分けるんです。

元の姿の間は、こつも通りで結構ですよ？

けれど じつらの姿の時だけは、わたしに従つていただきます。

その代償として 普段では、味わえないようなスリルをプレゼン  
トさせて頂きますから」

「スリル……とは？」

「あら 田が輝いてきていますね？」

けれど それは、経験してみてからのお楽しみです。

だつて 行動を起こす前から 種を明かしてしまつたら つまり  
ないでしよう。

冒険ところのは、何が起ころるかわからなから 楽しこんです。

皇子様…………ですか、ここに滞在している間 楽しみましょう。

嫌々来るという気持ちが吹き飛ぶような体験をプレゼントさせて下  
さい」

「今までの世話役と違つて 面白いじゃないか。

ナディア姫の場合は、トックドヒー緒にいることで 相当楽しませ  
てもらつたし」

「やつぱり 以前にナディア様が、投獄された一件 皇子様は、  
わざとだったんですね？」

一步間違えば 殿下は、斬られてしまつていたと聞きましたが「

「トックドヒー、本気じやなかつたさ。

それに いの国の王の騎士2人は、優秀だと聞くからな？

ちょっと ヒントを残しておけば 簡単に僕の悪戯によるものだ  
といつことが、わかつていた。

「いつも それがわかつていて 行動に緊迫感を出せやらる為に  
そのような行動を起こしただけだ」

「皇子に害する者は、いかなる者でも斬り捨てると剣に誓つたはず  
ですか？」

「だが お前には、ナディア姫を斬れないだろ？？」

それに 勘違こされてしまつてこるようだしな？」

「でしたら 今回の滞在で その誤解も解ければよろしくですね  
？」

「↙ローズ↘殿…… それ以前に、招待がバレた場合 国家問題  
になる可能性は？」

私はともかく 皇子を辱めたという事で 戦争に発展する場合も

「……」

「それなら 大丈夫ですよ。」

「いつもの皇子様の悪戯だと云々訳をすれば……」

「笑顔で とんでもない事を言つてくれるな？」

僕にこんな格好をするという噂が流れてくれたら どうしてくれる  
?」

「あら ご存知ありません?

宰相閣下の「実家は、成人する年まで 男児は女児として 女児は男児として育てるという風習があると聞きます。

子供の頃に そういうた姿をしているからといって 悪い噂が流れるでしょうか?」

「まあ 確かに楽しそうだからな?」

お前の企みに協力してやる

「光榮です。」

「では、参りましょーか」

### 訪問3（後書き）

さて 何が起つていいのでしょうか？

会話だけですが わかつて頂けるでしょうか？

次からは、ちゃんと説明も入れますので……

「本田は、挨拶が遅れましたこと 申し訳ありませんでした。

世話役の「ローズ」殿と話が弾みまして 時間が過ぎてしまったことを忘れてしまったのです。

どうか 彼女を叱らないで下さー」

皇子セレギヤーの発言に一同は、呆気に取られてしまっていた。

隣に立っている「ローズ」は、皆の視線を浴びて 一ヶコリ微笑むだけ。

トッドは、一歩後ろに控えており 王と王妃や彼等の臣下と臣を呪わせないようにしてござらじ。

「では、「ローズ」を氣に入つたととつてもよひしこのかじり?」

ミコアムは、扇を口元に当てて 発言する。

おそらく その後の側では、ワクワクして堪らないのだろう。

「ええ とてもユニークなお嬢さんだと思います。

いつまで滞在できるかは、定かではありませんが 楽しめるでしょう」

楽しめるところに 宰相を含めた何人かが、笑顔を引き攣らせた。

もしかしたら とんでもない事になるかも知れない と、考えているのかも。

「セレーティー皇子…………君の父君からば、2・3ヶ月ほどゆづくつするようのこと先ほど文が届きました。

我々も それを受け入れようと思つ。

この王宮では、しきたりがあるが 貴方は、祖国になると思つて和んでくれることを願つてこまよ」

王ゴカリイの言葉に 皇子は、”はい”と、浅く頭を下げる。

「疲れたでしょ」…………用意しました部屋でお休みなさい。

＜ローズ＞ お2人の部屋に案内を

その言葉を受けて 少女は、”畏まりました”と、丁寧に頭を下  
げて 後ろへ一步下がり ”こちらですわ”と、案内していく。

＼＼＼＼

「↙ローズ↙…………お前は、まるで物語に出てくる魔法使いだな？」

突然そう言われて、↙ローズ↙は、手に持っていた箱を取り落としそうになってしまった。

「突然、何をおっしゃるんですか？」

わたしは、ただの記憶喪失の女。

皇子様の世話役は、王宮の陛下さんの負担を和らげる為ですもの」

「本当に口の減らない奴だ。」

どんなに嫌がらせをしても、そんな面と向かって言つてくる奴は、誰もいなかつたぞ？」

皇子の拗ねた顔に、  
「ローズ」は、思わず苦笑してしまった。

「だから、皆さんの気を引いて悪戯するのじゃよ！」

けれど、それは、間違ったやり方です。

実際に体験してみて、わたしの考えは、間違っていましたか？」

その質問に、セレティー皇子は、一瞬考えるような素振りをしてから、ニヤリと笑った。

「確かに、楽しい事ばかりだ。

もしも、つまらなかつたら、お前を対象にもつと悪戯を爆発させようと検討するところだったが、久しづりに笑えた。

それに、滅多に見られないトッドの面白い姿も見れたからな？」

皇子の言葉に、控えながら歩いてくるトッドは、肩を竦める。

「お願いですから、そっちに、用覚めないで下さい、皇子。  
とびっきりつせ、じつじつです」

「ですが、トッド様？」

「いつもお似合いでしたよ？」

美しい銀髪は、目立つてしまいながら 黒に染めないといけないのは、残念でしたけれど

「ローズ」は、ニシ「ココと微笑んだ。

その発言に、銀髪の騎士は、顔を凍りつかせてしまつ。

「もしも 銀髪のままだつたら すぐにナディア姫に見つかってしまうだらうな？」

ちゃんと また、「ローズ」に変身させでもらえよ？」

主君の言葉に、トッドは、懸命に頭を下げてきた。

本当に 正体を見破られるわけには、いかないらしい。

「はい、お任せ下さい！」

すれ違う人が、みんな振り返るような美女に大変身しましょうね？

皇子は、可憐な姫様でしょうか……。

まあ 身分は、知られるわけにいかないので お嬢様ですけど「

「ローズ」は、心から楽しそうに 手にしている化粧道具で 人に化粧を施していく。

しばらくして 長身で銀髪の男性は、その場から消え 黒髪の妖艶なる美女が。

金髪に蒼い目の天使は、フワフワな縦ロールをした本当に可憐なる美少女に。

## 謁見（後書き）

誰も気が付かないほどの大変身だと想像してください……。

セレーティー皇子が王宮にやってきてから 1週間が過ぎた。

けれど 今のところは、今までのよひに苦情が殺到するところはない。

ただ 皇子は、今までならば見下してきた態度が改められ 逆に賞賛される と城の使用人達の間で噂が飛び交う。

理由は、不明だが それは、<sup>く</sup>ローズ<sup>く</sup>が世話役になつた事と関係があるはず。

なので この数日間 彼女は、歩き回るたびに その理由を聞いたことが多くなつていた。

おそらく リリアム様のお部屋に向かえば もっと追及が激しくなるはず。

何たつて あそこには、最強な方々が 勢揃いしているのだから。

「一体 どんな魔法を使ったの?」

そう遭うなり首根っこを掴んで言ったのは、一番年が近い侍女仲間のシャルロッテ。

彼女は、黙つてさえいれば すうじく美人さん。

けれど 実は、田舎貴族の出身で くローズが王間に召し上げられる前後に奉公する為に入宮してきました。

「あの悪戯皇子が、お茶を運んでいったら ちゃんとお礼を言ったのよ？！」

もしかして 嵐の前触れなんじゃ……

本気で心配しているシャルロッテに くローズは、何て答えたらしいのかわからぬ様子。

だって その傍らには、懸命に笑うのを堪えてる金髪の姫君とお付で黒髪の美人侍女がいるのだから。

「だけど 今 皇子様のお世話をしなくてもいいの？」

「この方々 どこの誰なのかは、知らないけど……」

「セレーティー皇子様の癪癩が激しいので 今之間は、私達がくロー  
ズへちゃんと案内して頂いている。」

私達 皇子と一緒に小間使いで同行したのだけれど……。

あまりに身分が低いから お乗る事さえも、無作法でしう。」

今では、もうその姿になるのを待ち望んで 役になつきつている  
のだから。

隣で度肝を抜かされているトッドさんと違つて 話しかけられれば  
堂々と答えてみせた。

まあ まだ声変わりしていない男の子の特権かもしれないけれど。

シャルロッテは、まだ声変わりのしていない甘つたるい声に メロ  
メロ。

最近気が付いたけれど この王宮にいる人達は、透き通る声に弱い。

「まあ そうだったの。

心から同情するわ?」

面と向かつては、あの皇子に言いたい事も言えないんですものね?」

絶対 祖国の大親王様と王妃様も、相當気に病んでいらっしゃるんじゃなくて?」

実のところ 元・王妃様の嫡子ってこともあって 扱われているけどね?」

大臣達の提案では、皇子としての身分を剥奪させて 第一皇子のガルディー様を皇太子に推すとする動きがあるそうよ?」

今は、王妃様だけれど 側室という立場の時に生まれたでしょう?」

でも あつちの皇子様の方が、とっても性格が直しいらしから……」

……」

ちょっと、言ひ過ぎな気がして 止めようとしたら セレディー

皇子は、一いつ口ひと笑みを浮かべている。

「本当に その通りです。」

でも ですから この国で羽を伸ばすよつこと数度にわたって、滞在することになつたんですよ。

あまり御自分が、王宮にいましたら 話し合いが進まないでどうからと」

「あら てつきり、王様がコウリイ陛下に泣きついたんだとばかり思つていたわ？」

まさか 皇子血ら 滞在することを望んでいるだなんて。

あんなに色々と悪戯ばかりしているから 早く追い返されたいと思つてゐるとみんなで話してたのに。

もひ…… 私、そつちに賭けてたのに

…… そんな話題で賭け事をしていたのですか……

「ローズ」は、呆気に取られ 肩を竦めるしかない。

シャルロッテは、そんな同僚の様子に 不思議そうな顔をしていたが 背後から名前を呼ばれたので 駆け出していく。

何でも 仕事の途中だつたとか。

盛大み何かが破壊される騒音を轟かせて 破壊魔・シャルロッテは、いざ仕事場へ。



／＼＼＼＼

「セレニティ様（セレーティーの偽名）…………あまつこも自然すぎて驚きました。

もしかして 泣いてしまうのではないかと」

「ローズ」は、真剣な表情を浮かべて 息をついた。

その言葉に 姫君は、田をパチクリ。

トッドは、無言でドレスの裾にあるレースを眺めているだけ。

「まさか 何を言われているのかも わかつていなかつたわけじやありませんよね？」

貴方は、お馬鹿なことをしているかもしだせんが わたしが見た所 それは、逆でしょう？

まさか 天才を通り越して 当たり前のことがわからなくなってしまった……？

「ああ…………わざ侍女が話していたことについてか？」

まさに 本当にことだがな?

僕も サアセトセツして欲しいくらいなんだけど」

その発言に <ローズ>は、呆気に取られてしまう。

「ガルディーは、本当にいい奴だ。

あいつなら いい王様になれると思う。

悪い噂は、全部 僕が引き寄せていれば あいつを悪く罵る連中は、いない。

亡くなつたとは、いえ 僕は、王妃の嫡子。

あいつは、今こそみんなに慕われているけど 母上が亡くなる前は、側室の嫡子として 隠湿な嫌がらせを受け続けていたんだ。

これは、定かではないが ここの國を貶めようとしていた連中の姑息な手段の余波だつたらしい。

我が母上もそうだが ガルディーの母も//コアム王妃の友人だつたのだから

<ローズ>は、目を見開いて 息を呑む。

「色々と悪く言つ連中は、ガルディーの母が母上を殺したのではな  
いかと言つ出すものもたくさんいる。

確かに 母上の死には、何かと不審な点があるらしいからな?

だが 王妃は、母上を殺していない。

彼女には、そんな残酷なことが出来ないはずだから。

ガルディーは、彼女にソックリだからな?」

そつキツパリと断言できる婆は、ちょっとカッコイイと思つゝロー  
ズ。

「侍女達の噂話によつまると、**「ローズ」**は、セレーティー皇子やトッド様とでなべ、そのお付きのお嬢様方と一緒に行動を共にしてこなつうです」

シャーリーは、コップに紅茶を飲みながら、報告した。

「あら、**「ローズ」**は、皇子の世話役なのではなかつたの？」

キョーテンとしたのは、王妃のミコアム。

「ええ、そのはずなんですがね？」

「何氣なく、**「ローズ」**に聞いてみたんですけど、ただ笑うだけなんですね」

リーンは、心配そうに、首を傾げている。

「**「ローズ」**は、仕事熱心な子だから、何か考へがあると思つわ？」

それで、皇子の様子は、どうなの？

被害は、出でいない?」

ミコトームの質問に、侍女達は、一斉に首を振った。

「ありませんわ ミリアム様。

逆に、意外な解答ばかりで……」「

そう言つたのは、シャーリー。

「ですね?」

驚いたこと」「ひのきの息子にも、優しきやつです。

この前、ミーナのお見舞いに行つてきましたが、いらして、いたと窺いました。

でも、誰が来たのかは、秘密なのだそうで

リーンは、不思議そつこねぐ。

「なあ、こ?」

ミイナは、何かを知っていることなの?

今度、イリアに聞いてもらいましょうか。

彼の粒良な瞳で見つめられたら 口の堅こ//イナも、滑らせるかもしれないもの。

普段は、口下手で話さない子なのに イリアの事になると本当に色々と教えてくれるから。

この前の盜賊の一件も ミイナの式神で発覚したことだものね?

王妃の暴走的な発言に 誰も止められる人物は、この場にいない。

ユウリイ王と騎士2人と宰相や侍女頭は、他の仕事がある為 今日のお茶会には、参加していないのだから。

陛下方は、何でも新たに不穏な動きを察知したらしく その話し合い。

ルチアは、新しく入ってきた侍女の教育中らしい。

そして今日のお茶会のホステス役は、恐れ多くも ミリアム王妃だった。

一国の君主の奥方に　このような仕事をさせるといつ事は、無礼極まりないはず。

けれど　当の本人が、やると決めてしまったことなので　止める事の出来ない。

その上　彼女の入れる紅茶は、とても美味。

さすがのルチアも　これには、舌を巻いて　賞賛してくれるばかりなのだから。

何でも　王宮を「コッソリ抜け出した時に　財布を落としてしまいそのまま下町の喫茶店で住み込みで数日働いたらしい。

その時の経験のお陰で　それまでは、匂いを嗅ぐだけでもとんでもない事になっていたミリアムの入れた紅茶は、素晴らしい出来になつたとか。

勿論　コッソリ王宮を護衛もなしで1人で抜け出した咎で　ルチアには、数時間の説教を受け　王命で侍女に扮した武術に長けた女性を紛れ込ませる事を約束させられてしまったそうだ。

そして その武術に長けた侍女というのが、今もこのお茶会に参加している シャーリーとリーンに出産を控えたミイナだつたりする。

彼女達が、そういう経緯で侍女になったという事実を知るのは、それを命じた王と直属の臣下。

そして 偶然知ったとはいへ 守られる側の王妃のみ。

実は、ある事情から ユウリイ王よりも 王妃ミリアムの命が狙われることが、ごく当たり前となつていた。

侍女頭であるルチアには、武術に長けている下級貴族の娘 と説明してあるが 事実は、伏せられている。

信用していないというわけではなく 真実を知り 困惑を防ぐ為。

万が一の場合 彼女達は、他の侍女の命よりも 王妃だけの盾になる覚悟が必要不可欠なのだから。

普段は、侍女頭の命に従つているものの 彼女の犠牲にしなければならない可能性が高い。

普段は、オットoriしており 虫も殺さぬような性格だが 彼女達が、侍女として上がつてから 不審な死を遂げた下働きの者も年々増えていた。

その中には、年端もいかない子供もあり 外見に似合わず 残酷な面も併せ持つ。

毒を仕込まれる事は、日常茶飯事となつており 毒を察知しやすい能力を持つミイナが、これまで 毒見する事となつていた。

けれど 現在は、妊娠休暇中の為 危険度が増すが リーンヒシヤーリーが、交代で事前に毒見を行つてゐる。

そして 王妃が、自分を守つてくれる人物が誰なのか知つた事件によつて 彼女に取り巻く侍女は、一気に減つてしまつ。

驚いたことに ほとんど全員が、刺客だといつことが判明したのだから。

この時ばかりは、あのルチアも驚きを隠せず 高熱で寝込んでしまつた。

自分が、懸命に教育した侍女の中に 敵の送り込んできた暗殺者が

いたという真実に耐えがたかったのだろう。

「けれど つまらないわ？」

今日は、陛下達も 宰相達もこないんですもの。

しかも くローズくは、セレディー皇子と一緒にだし……。

ハプニングが、起これば 楽しいのに」

さすがの爆弾発言に 侍女2人の声が、その場一体に響き渡った。

王の間では、国王を含めた臣下達が険しい顔になっていた。

「困った事になつたな？」

今回の皇子の滞在に、こんな理由があつただなんて……」

宰相は、頭を抱えるかのように 溜息をつく。

「この事……セレティヤー皇子は、存じておられるのか？」

コーネリアは、兄と同じ顔をして、唇を噛む。

「知つてこらのかも。

ミイナの話ぢや、この前、**「ローズ」**に連れられて家に遊びに來たらしいんだけど？

ちよつとそつそつの話では、触れないように注意してこる感じだつたらしいから。

**「ローズ」**の方は、自覚無しにそれに合わせていたらしくし

イリアは、首を傾げて 言ひ。

「だつたら トツドも知つてゐつて事か。

まあ 話してくれるはずもないだらうナビ

コウリイは、珍しく真剣な顔になつていた。

「けれど 下手すれば 」こちらにも余波が来るのでは?

あちらの王は、平和主義ですが 周りの大臣の中には、乗つ取りを企む者もいるとの話です。

先の一件でのミコト様に送られてきた刺客も そちらの一派の者とこいつとは、確實ですし

宰相の言葉にて國王は、遠くを見つめる。

「やはり……王妃に俺の真名を預けてこることが、刺客を何度も送られてくる原因になつていてるんだろうな?

俺を殺すことは、真名を知らなければ 致命傷を打たれることが出来ないのだから

その発言に、臣下達は、顔を見合わせた。

「まさか、王妃の命の危機を回避する為に、真名を撤回させるおつもりじゃありませんよな？」

そんな事をすれば、ミリアム様は、確実にキレますよ？

最初に、儀式を中止すると言い出した時よりも……確実に。

それに、王妃は、古来より、伴侶となる王の命綱である真奈を授かり、身を持つて守る事が、最も重要な任務となっています。

以前に、ミリアム様とその話題になりましたけれど、の方は、真名を守っている事を誇りとしているようでしたからね？」

「一ネリアは、呆れたように、断言する。

「ああ、あの時は、本当に厄介だった。

1人で王宮を飛び出して、前・国王付きの騎士のウイリアム候が、影で護衛に付いて下さり、使役でその場を知らせて下さりばければ、どうなつていたか」

宰相は、思い出したよつて 遠くを見つめた。

「そつといえは そんな事ありましたつけ？」

ルチアさんの旦那さんは、今でも 万が一の事を考えて ミリアム様が足を運びそつな場所に影を忍ばせてくれているそつですよ？  
まあ…… それも ハローズが来てからは、あの脱走癖も消えて  
いるみたいですけどね？」

イリアは、そつ眩じて ニヤリと笑う。

「笑い事じやない。

数日も戻られなかつたと思つたら 下町の喫茶店で下働きになつておられた事もあつたじやないの。

すぐに駆けつけたから良かつたものの 後少しでも遅れていたら  
刺客に襲われていたところだつた。

王妃本人は、おいしい紅茶を入れる技術を身に付けたと嬉しがつて  
いるが……」

第一騎士の言葉に 王も、言葉が見つからぬ。

「だが、その一件があつたからこそ、侍女の中に忍び込ませる」とを承諾させたんだぞ？」

それまでは、嫌の一点張りだったからな？

自分の身は、自分で守るから……と。

最初は、それが誰なのか明かしていなかつたが、もう周知になつてゐるがな？」

「ああ、あの一件は、懐かしいですね～？」

俺……自分よりも武器の扱い方に長けている女性、初めて出逢いましたから。

あの時から、俺の心は、ミイナに奪われたんですね

「そー……惚氣るなッ！」

仕事に支障が出るようなら、お前を他の場所の騎士に下げなければならぬんだからな？」

ミイナには、子供が生まれたら、またミリアム様付きの侍女兼護衛に戻つてもううのは、確定なのだから

「

宰相の冷たい一言に、イリアは、”肝に命じますー”と、敬礼。



「ヒカルで セレーティー皇子は、なぜ 自分の父王の真名を持つている?」

普通ならば 現・王妃のソフィリアが、守るべきだ

コウリイの質問に 宰相も、首を捻った。

「あまり例が無いのですが もしかしたら 皇子をお産みになられた時に 真名も一緒に皇子に授けられた可能性があるそうです」

「例が無いのに なぜ、そうだと断言できる?」

兄の発言に コーネリアは、美しい顔を歪める。

「前・王妃が亡くなられて間もない頃 他国からの攻撃を受け 王が瀕死の重傷を負った話は、お前も知っているだろ?」

もしも 真名を授かつていた人物が、死亡した場合 通常ならば 真名は、王の元に戻つてくるものだ。

だが 王は、奇跡的に回復を果たした。

つまり 何者かが、王の真名を守っていたといつうことになる。

今の王妃は、その頃 まだ側室の位のままだったし その戦争も、前・王妃の死を待っていたかのような襲撃だった為 真名を誰が守つているのかを確認する暇も無かつたと聞く

宰相は、そう言って 溜息をついた。

「つまり 一番可能性が高いのが、真名を所持していた母の胎内から生れ落ちた息子に 受け継がれたってことだな？」

真名の形は、人それぞれだけど 体の一部として当たり前の見た目ならば 乳母でも気が付かなかつただろう。

でなければ こんな面倒な事になつてゐるはずがない。

おそらく 前・王妃の死は、真名を巡る争いに巻き込まれたと結論付いて間違いないはずだ

ユウリイの説明に 臣下達は、息を呑む。

「もしも その事が公になれば 皇子の周り、相当騒がしくなるのでは？」

当の本人は、自覚を持つているのでしょうか？」

「コーネリアは、真剣な顔になつて 言つ。

「どうだどうな？」

もしも わかつてゐるんなら あの皇子は、王妃と正反対の部類になるぞ？

まあ…… 根本的には、似ているかもしだいけど

イリアは、どこか呆れたように 腕を組んだ。

「じゃあ 何か？

あの皇子の問題行動は、自分の近くにいれば 死が待つてゐる ことを気付かせようと？

確かに 前・王妃が亡くなる前後して 皇子の暗殺も未遂で何度も起つていたと聞いたが

宰相は、どこで仕入れてきたのか 様々な情報を提示する。

そこには、皇子の唯一の騎士となつてゐるトッドが忠誠を誓つそれ

までに遭遇したという 殺人未遂の事細かな内容が収められていた。

中には、一緒に育ったはずの乳母兄弟までもが セレティー皇子の命を狙う刺客となっていたといつ事実まであったのだから 気分が悪い。

「IJの乳母兄弟ですが 皇子より5つほど年上でしてね？」

母親…………つまりセレティー皇子の乳母は、彼を庇つて 刺客に殺害されています」

宰相の補足に 齧は、溜息をつく。

「母親を殺された恨みを、守るべき相手に向けるだなんて…………ッ！」

私達も、そのような事考えたこと無いことこの上ない。

母が死んだ事は、確かに哀しかったけれど 大切な方をお守りして殉死したのは、誇りに思ひのつて 私達だけなの？」

コーネリアは、唇を噛み締めながら 呟く。

その声は、微かに震えている。

妹の気丈な様子に　宰相は、ゆっくり近寄つて　肩を優しく叩いた。

そんな兄妹の様子を見守つて　コウリイは、申し訳なさそうな顔ををしている。

「ああ　そういうえば？」

宰相閣下とリアの母君は、陛下の乳母だつたんでしたっけ？」

イリアは、ソッと王座に近寄つて　小声で言つた。

「ああ　その縁があつて　2人とは、幼い頃からの幼馴染なんだ。

父親は、父の第一騎士で　母親は、平民だつたが　何世代か前に没落した貴族令嬢だつたらしい。

礼儀作法も、申し分なかつたから　俺の乳母に抜擢された。

ルチアとは、同じ頃に王宮に上がつてきた仲で　親友だつたと聞く。

だが　俺を狙つて、王宮に忍び込んできた刺客と相打ちになつて3日ほど意識を何度か取り戻したんだが　そのまま亡くなつた。

相手の刺客は、即死だつたらしいんだが　毒使いだつたらしくて

…………な？

2人の母のサーチャは、ミイナ達の先代の護衛だった

ユウリイは、低い声で 幼馴染の2人を見つめる。

＼＼＼＼

「けど 何だか納得いかないんですね？」

何で 真名を王妃に預けることが、しきたりになつているんです？

普通の一般家庭じゃ 滅多なことが無い限り、そんな厄介な儀式  
しませんよ？」

イリアは、不思議そうな表情を浮かべて 首を捻つた。

「あまり 口に出す」とじやない。

真名を王妃に預けるところのは、古き時代の王族の聖なる儀式の1  
つだ。

戦争が起これば 女子供は、王宮の祈りの間に 預かつた真名に  
自らの祈りの力を注ぎ 勝利することを願い続ける。

遥か昔 いの国を建国した騎士を想い ずっと願い続けていた皇

女の願いが、神々に届けられ 勝利を得たようだ……。

俺も 最初は、そんなのただの迷信だと思っていたが あいつの起こした奇跡は、イリア…………お前も自分の目で見たはずだ」

「確かに そうでしたね？」

あんまり平和が続くもんですから 忘れてましたよ。

けど また 戦いが起こりうですかね？」

「↙ローズ↗…………お前、どうして 決まった時間にナーティア姫の検診を受けなければならない？」

「どこか 病気なのか？」

セレディー皇子は、心配そうに 尋ねてきた。

今の装いは、いつも出歩いている姫君ではなく いつもの皇子の姿だ。

先ほど今まで Hの間で形式な挨拶をしたところ。

その質問に ↘ローズ↗は、”問題ありませんよ”と、微笑む。

「わたしは、以前に申し上げた通り 全ての記憶を失つております。

それに お恥ずかしながらお見せ出来ませんが ここに辺りに薔薇の形の痣があるのです。

原因は、わかりかねますが 痙が濃くなっているので 毎日ナーティア様に経過を見て頂くよう 陛下やミリアム様からのお達しなの

ですよ。

別に どこのかどつ悪ことこうわけでは、あつません。

まあ ナティア様は、違う方面のことと心配なやつはいるよつなん  
ですけどね?」

その言葉に 皇子の表情は、どんか暗い。

どつしたのかと口を開く前に ヴローズは、後ろから誰かに腕  
を掴まれた。

そして そのまま 部屋の外へと引き摺られてしまつ。

一体 何事か と顔を上げてみると 外に出ると、すぐに ツ  
ツドが物凄い勢いで頭を下げる。

「「無礼を承知で申し訳ない」

おやりへ 駄嗟のじだつたのだりへ。

見ていくじが、氣の毒になつてくる。

「お顔を上げてください。

詳しい事情は、存じ上げませんが 先ほどお皇子の様子からして  
話を続けさせるのは、酷だつたのでしょうか。」

「ローズ」は、先ほどおセレディーの顔を思い出して 呟いた。

「はい 申し訳ない。

皇子は、時より 貴女といひ自分の母君を重ねられてこるようでしたから

「母君と?」

詳しきは、お聞きしておりませんが 皇子が幼い頃に亡くなられたとか

「ローズ」は、頭を伏せてこむトシダに向かって

「セレディー皇子の生母であられる前・王妃のセレニア様は、とても  
美しく慈悲深い方でした。

ある事情から 行き場を失つた私を、受け入れるよつ王に掛け合つてくださつたのです。

そして 跡継ぎであられるセレーネィティー皇子が、お誕生になられて  
とても喜んでおられました。

けれど セレーニア様には、それ以前から 刺客が送られてくる  
ことが多かったのです。

そして とうとう 亡くなられてしまった

「では やはり、何者かに暗殺されたと?」

「ローズ」は、険しい顔になつた。

「詳しいことは、わかりかねます。

ですが 間違いなく 王の命を狙つた事による暗殺は、間違いな  
いと考えております」

断言する騎士に 少女は、驚きを隠せない。

「「ローズ」殿…… 貴女は、真名を」存知ですか?」

コウリイ陛下の真名は、現在 ミリアム王妃が守つておられますが

その質問に、**「ローズ」**は、以前にルチアから聞いたことを思い出します。

「はい……確かに王妃様が、いつも大事に守つておられる陛下の瞳の色と同じ色の指輪のことですよね？」

陛下の場合は、指輪に收められておる宝石ですが、真名は、人それぞれ形が変わつているとお聞きしました」

「はい、この世界では、古来より、王と王妃の間で、真名を守るところ古きしきたりがあります。」

それは、王に即位したと同時に行われる聖なる儀式とも呼ばれております。

戦いに身を投じる者を想い、その命の糧となる真名を祈りと共に守る。

それが、女性だけの戦いとも比喩されているのです」

「もしかして、前・王妃様が命を度々狙われていたのは、王を狙つてのことといつ事ですか？」

その結果、セレディイー皇子の母君は、殺害されてしまった……

「ローズ」は、目を大きく見開いて、息を呑む。

「お察しの通りです。

勿論 皇子自身も 命を狙われたことがあります。

そして その罪を、何度も現・王妃様とその御子息に向けられるよう 複雑な人間関係もあるのです。」

「でも 皇子様は、断言なさいとおられました。

ガルディー皇子もソフィリア王妃も そのような事をなさらないと。

まさか それは、違うと…………？！

混乱してきた「ローズ」に 銀髪の男は、苦笑する。

「ええ 勿論 お2人は、犯人ではありません。

セレミア様を殺害する理由は、どこにもなかつたのですから。

先ほどのコウリイ陛下の真名をミリアム王妃が、守つたおられたよう に セレミア様も、王の真名を守つていた。

同じ男性を愛したとしても その命の危険にしてまで 恋敵を暗殺する理由が、どこにあるでしょう？

「それに 皇子を狙う理由もあつませんね？」

「ローズは、真剣な顔になつた。

「だつて 王の真名は、セレーティー皇子が所持しているから……」

「その発言」 わすがにトトシも 田をパチクリさせてしまつ。

「どうして……こつ、ねぬわせん。」

「今の話を聞いていて ひょっと、気になる」と出でてきたんです。

皇子の変身を手伝っていた時 後ろの首辺りに 蝶の紋章の様なモノが、ありました。

まるで ハメラルドのように輝いていたのが、印象に残つています。

皇子の瞳の色は、母君譲りと窺いましたが お父上は、ハメラルド色なのでは?」

「まさか それだけの要素で結論をたるなんて 少し驚きました。

ええ その通りです。

紋章が露になつたのは、じく最近のことですが その事が発覚してからは、頻繁に皇子のお命が狙われるようになります。

間違いなく 何者かが、間者となつていると王もお考えになつておられます

「では それを一掃している間 皇子は、こちうに訪問しておられるという事ですね?」

切り返しに もうアッシュは、驚かない。

「皇子には、内密にしておりますが もしかしたら お気付きたくなられているかもしません。

悪戯行動が悪化したのも 皇子が最も信頼していた乳母兄弟が、皇子暗殺に関わっていたと発覚してからですのです。

彼らは、皇子殺害未遂で 処刑されましたが……

それを聞いて ヴローズは、唇を噛む。

「2人の母親は、皇子の乳母で 皇子を守つて亡くなつたのです。

その頃は、まだセレミア様もご健在で 母を亡くした2人に他の大臣達の反対を押し切つて 様々な待遇を「えになりました。

ですが あの兄弟は、その恩を仇で返したのです。

なので そんな風に「ローズ」殿が悲しむことはない

「けれど セレディー皇子にとつては、とても大切な方々だったのでしょうか？」

いくら 自分の命を狙つていたとしても その心は、偽れないはずです」

そう呟く「ローズ」の口からは、大粒の涙が落ちている。

トッドは、そんな少女の様子に 何とも言い難い様子で 見守つているだけ。

そこへ 誰かが、走つて来る音が響く。

「トッドー

貴方、何をしているのです！？

「ローズ」を泣かせるだなんて 最低だわ？！

金きつ声は、ナディア王妹殿下のものだつた。

ナディア王妹殿下の出現に トッドは、明らかに動搖している様子が見て取れた。

殿下自身も どこか感情的になつてゐる。

「くローズ」を泣かせるだなんて 相変わらず 最低な男ッ！

セレミア様とソフィリア様のお話から 少しほ、マシになつたと思っていたのに……」「

くローズ」は、突然の事に涙が吹つ飛んで 急いで、今にも飛び掛らんとしているナディアの腕を全力を掛けて止めに入つた。

「ナディア様……誤解ですッ！

別に トッド様に泣かされていたわけじゃありませんって……

以前も 迷つていていた時に 宰相閣下に案内されて 怖い話をされて驚いていたところに 苛められている つてシャーリーさんに誤解されてしまつた事もあるんですから……」「

「宰相の場合は、誰が相手でも 苛めてくるよう」しか見えません

ツ！

けれど、Iの男…………トッドの場合は、用がない場合しか、他人と会話する事もない。

なのに、さつき私が見た状況では、貴女がトッドに迫られて、泣いているようにしか見えなかつたわ？」

その指摘に、  
「ローズ」は、困つてしまつ。

確かに、腕を掴まれていた状態が続いていたのだから。

トッドの方に視線を向けてみるが、不自然に目を逸らされてしまつた。

「本当に、何もされていない？！」

いつも検診時間ピッタリに来るのに……、  
「ローズ」つてば、いくら待つても来なかつたでしょ？

だから、セレディー皇子に厄介ごとを頼まれているんじゃないかと迎えに来たのよ」

ナディア殿下は、そつ言つて、厳しい視線を銀髪の騎士に向ける。

視線を感じているようだが、トップは、絶対に振り返らうとした。

そして、そっぽ向いたまま、”殿下の元に戻ります”と、短く言うと、部屋の中に入ってしまう。

男がいなくなつたのを確認して、ナディアは、再び「ローズ」の顔を覗き込んできた。

「、ローズ、」……わざわざ、脅されていただけなのでしょう?

当の本人は、消えたわ?

さあ……何があつたのか、話して?」

あまりに緊迫している様子なので、「ローズ」は、固まってしまう。

その反応をどう取ったのか、殿下は、さらに険しい表情に。

観念して、「ローズ」は、口を開いた。

「セレーディー皇子が、お父上の命綱を守つたおいらねが、お命を狙つ輩がいる。」

その中には、皇子が最も慕つていた乳母兄弟もいらっしゃったと伺いました。

実の兄のように慕つていたそつなのに、処刑されてしまつたと。トッド様は、同情する予知はないとおっしゃられたのですが、わたくしは、悲しくて……。

やつじてこる時に、ナディア様が、いらっしゃったのです

「ああ、そういえば、前は、一緒に来ていた兄弟が、一緒に来なくなつたわね？」

「うう……処刑されたの。

母が、皇子を守つて死んだからといって、逆恨みするなんて……

「馬鹿ね？」

「いか、感情のない発言に、ハローズは、息を呑んだ。

その反応に気が付いたのか、ナディアは、哀しそうに笑つた。

「これは、王族に生まれた宿命よ。

誰かが犠牲になつて 生き残る。

私と兄上も そうやつて 今まで生き残つたわ?

今の私は、王位継承権を返上したから 名前だけ殿下だけど……  
それまでは、色々な刺客を送り込まれたし。

信じていた人が 実は、刺客だつたこともあつたし 大切な人が、  
犠牲になつたこともあつた

遠くを見つめて眩く様子に ヴローズは、不思議そうに 首を傾  
げる。

「宰相とゴーネリアの母も 私と兄上の乳母だつたの。

けれど 私達を狙つた刺客と相打ちになつて 亡くなられたわ?

後で聞いた話 元は、母の護衛を務めていた侍女だつたらしいんだ  
けどね?

2人は、私達を恨むことなく 今じゃ 国の為に忠誠を誓つてく  
れでいる。

私怨で 守るべき主を、害しそうとするなんて 以ての外なのよ

そう語るナティアは、ちゃんと王族としての覚悟を決めていくよう

に思えた。

## 突然

「ローズ」は、その日「」当たり前に、皇子と騎士を中庭へと案内していた。

とても晴れやかで、空気も澄んでいる。

庭を飛び交っている風が、心地よい。

「何度も訪問していたが、こんなにも美しい場所があつただなんて知らなかつた」

セレーティー皇子は、嬉しそうに、目を輝かせていた。

子供らしい評を浮かべている様子に、ローズは、嬉しそうに微笑む。

「光榮です。」

ここは、わたしが初めてミリアム様の侍女に上がらせていただいた時に、案内された思い出の場所なのです。

色々な花があつて、目の保養にもなるのですよ？」

その言葉に セレギティーも、つられたよつてに笑つ。

「亡くなられた母上に伺つた事がある場所に似ているな？」

それに トッドの話にも出てきた

視線を受けて 後ろに控えていた銀髪の騎士が、ゆっくつと歩み寄つてくる。

「ここは、先代王妃様が自らお育てになられたと聞いております」

トッドの言葉に ハローズも、ある事を思い出した。

「ミコアム様のお話ですと ここは、幼い頃からの隠れ家だったそうですね。」

宰相閣下や「コーネリア様方」と一緒に 遊び回っていた と。

「ここは、教育係の方々を巻くのに便利な場所だつたそうなのです」

「あのユウリイ王にも そのよつな頃があられたかッ！」

しかも 堅物な宰相までもが、そのような行動をしていったなど……  
「意外だな？」

皇子は、楽しそうに笑っている。

「誰でも 子供の頃というのは、純真なのですよ。

セレディー皇子も、後何年かすれば 立派な殿方になられると思  
います」

正直な感想を話すと 目の前に立っているセレディーが、真剣な  
顔になつていてことに気が付いた。

何だか その視線は、こぞばゆい。

「前にも話したが 僕は、王位継承に興味ない。

ガルディーが、王になればいいと思っているのだから。

だが 僕の存在は、色々な火種になるといつことも知つている。

今は、時ではないが それが片付けば 母の実家の養子に入ろう  
と考えているんだ」

その話を聞きながら、  
「ローズ」は、田をパチクリさせてしまつ。

なぜ そんな大事な話しき、自分にするのだろうか？

「やつなれば、俺は、ただの下級貴族でしかなくなる。

今まで、王族の第一皇子であるセレーティーに付きまとつていた連中も、手の平を返すだらう。

金魚の糞達も、僕を蔑む側に回る。

それまでは、王族である事で守られていっても、位が下がれば、簡単に蹴落とされる事もありえることだ。

だが、僕には、どうしてもやりたい事がある

セレーティーの言葉には、どこか熱が籠つてゐるよつだ。

「僕は、ガルティーが、父上のよつたな賢王になれるよう、一から基盤を作つていきたいんだ。

その為には、色々と問題も出てくる。

だが、僕は、  
「ローズ」がいてくれたら、どんな事でも乗り越えられると想つんだ

皇子さま、せうまいと ホーリーズの手を手にとつて 甲に口付けを落とした。

キョトンとしていると 耳まで真っ赤になつて セレディー皇子は、”返事は、こつでも”と、言い残して その場から立ち去つていぐ。

トッドは、皇子の後を追つていつたようだが 苦笑氣味。

「ローズ」は、意味がわからず 立ち去りはじめていた。

「一体…………何が起つたの？」

目をパチクリさせ ホーリーズは、手の甲にて視線を向ける。

「え…………これつて？」

セレディーが口付けた手の甲には、薔薇の紋章が浮かび上がつていた。

「どうこう事なのかしら…………なぜ？」

それに 胸に浮かび上がっている戀にも、似ているような気が……」

……ガサ……ガササ……

背後から 足音が聞こえたので 振り返る。

すると 田の前には、太陽の光の逆行で見えないが 何かを振り上げているらしく。何者かが、

避けようとするも 足が竦んでしまい その場に座り込んでしまう。

そして 空氣を切るような音が、耳に届く。

何か、暖かい液体が体を伝つていった。

何が起こつたのか、理解できないでいると いくつかの足音が、微かに聞こえてくる。

それが、誰なのかを確認して 〈ローズ〉は、その場に崩れ落ち

た。

闇の中に入り込んだ時に 入ってきたのは、甲高い悲鳴……。

「いやあ ッ！ ッローズ、ナーナー！」

「ミリアム様……足元にお気をつけ下さいね？」

リーンは、真剣な表情を浮かべて言った。

「ちよつとリーン?

過保護すぎやしないかしら?

わたくし そんな風に手を引かれるの 恥ずかしいのだけど?」

ミリアムは、少し顔を赤らめてしまつている。

「あひあひ……………そんな事をおつしやいらぬいドトヤー。

我々は、心からお轟びを申し上げてこなのでしょう?」

シャーリーは、弾むよくな口調で 微笑む。

「ちちうえが、もつしあげておりましたが おうひやまは、オメデタイだぞうですね?」

ボクからも おんれいもつしあげまする」

リーンのスカートにくいついている幼いプラチナブロンドの幼い男の子は、キリっとした眼差しで 軽く会釈した。

「ちすがは、宰相の息子…………顔立ちも似ている分 ミニチユアね?」

将来 あんな風に仏頂面になつて欲しくないわ~?」

王妃は、メロメロになりながら 幼子に抱きつぐ。

「残念ながら ネオは、おそらく父親似です。

家にいると いつも真似ばかりしているんですから。

最近じや 口調ですね?」

リーンは、苦笑しながら 息をついた。

「やついえば ネオ?

あなた………… 最近、金髪を巻毛毛にした女の子と一緒に遊ぶ事が多くなつたそうだけど?

一体 デジで知り合つたのかしら?」

シャーリーは、思い出したように 嫁つ子の顔を覗き込む。

「金髪の…………?

ああ ロックテが、会つたと話していたわ?

皇子付きの使いだと話していく…………名前は、確かにセレニシアだつたかしら。

「ネオ………… その方どー一緒にいたのね?」

リーンの言葉に ミリアムは、足を止めた。

突然歩みが止まつてしまつたので 一行は、少し転びかけてしまつ。

「どうしたんですか…………急にッ！」

先ほども申し上げたように元轉ぶのせ…… //コアム様？」

シャーリーは、皿を大きく見開いてくる主の様子に、”どうなさいたのですか？”と、困惑する。

「セレーネ、どこかがおかしくなった前は、セレーネイー皇子の母娘の面前よ。

それに、皇子も、お美しい金髪よね？

「ローズ」がこつも王宮の中で連れ歩いていたのは、その少女だと聞いたけれど……」

シャーリーとリーンも、その事に気が付いたらしく、顔を見合わせた。

「セレーネ、おうじは、なこじょだとおうじゅつにこまつた。  
ミーナもこつてこめすよ？」

「だけど、ローズ」が、ひみつのあそびだから…………つて。

でも、ボクは、セレーネのすがたのとそのおうじ、だこすきですか。

だって やせしいから

ネオは、リリーフしながら 聞く。

「誰つも気がついたのかしら？」

ミコトムは、心配そうに 首を傾げる。

「 リーズは、とおがくれば みんなにまなすつもりだといって いました。

おひじも といともたのしんでいて……。

セシヨは、すうじくはすかしかつたけど いまは、いままでしらなかつたこの辺のすばらしことをじるじとができるとおつしゃられていました

「 リーズいらっしゃうに考えですね？」

確かに 皇子は、その遊びのお陰で 皇子として接する以外の皆の姿勢を知る事が出来たのかもしれない

リーンは、我が子の髪の毛を撫でながら 微笑む。

だが、ネオの体が、突然、強張った事に気が付いて、”どうしたの？”と、顔を覗き込んだ。

そして、息子の顔色は、真っ青になつており、ミリアムとシャーリーも、心配そうな顔になつた。

「あつちから、ちのにおい……。  
なにかが、きれるおと……きこえた……。」

血の気が失せている幼い男の子の発言に、女三人は、顔を見合わせてしまつ。

シャーリーとリーンは、ガーターの下に隠されているそれぞれの武器を取り出し、王妃と幼子を背後に回し、ゆっくりと歩み寄つていいく。

すぐ先の茂みでは、近づくに連れて、確かに鉄の臭いが……。

息を潜ませながら、一同は、進む。

そして、視線の先に広がつたもの……。

自分達の姿を確認して 崩れる背中から斬り付けられていたくローズへ。

「いやあ ッ！ ベローズへー！」

ミリアムは、我を忘れて 甲高い悲鳴を上げた。

王の間には、王と王妹殿下のみが その場にいた。

他の臣下達には、違つて調査に専念してもらひつてこる。

「ナディア……………<ローズ>は、まだ意識が戻らないのか？」

ユウリイ王は、悲しげな表情で 妹に問い合わせた。

「傷は、出血の割に 深くなかった。

傷痕も 残らずに復元したのだけれど 意識の糸だけが、どこか遠く過ぎるみたいで 見つけられないのよ。

もしかしたら 襲い掛かったのと同時に 意識を封じ込める呪いを施したのかもしれない

その言葉に 王座に座る王の顔が、険しくなる。

「<ローズ>を襲つた刺客は、一体何者なのか……………？」

王宮内には、俺と宰相が 定期的に結界を張り直しているはずだ。

なのに そんな中に 刺客が往来するなど……」

「ローズが襲われた場所は、中庭の温室。

あそこは、子供の頃から 私達の隠れ家だった事を覚えているでしょう？

つまり 刺客自身も あの場に見を潜んでいたといつ事になるの。ネオが、血の臭いがすると駆けつけたといふ 刺客と鉢合わせたそうよ。

シャーリーとリーンの話だと 途中まで追つたそののだけど深入りは、危険だと判断したらしいわ？」

「成る程…… その刺客は、この王宮の造りに詳しいといつ事か。

今も王宮内に ローズを襲つた刺客が居着いている可能性もあるな？

早急に 身辺の洗い直しをさせよ！」

「その意見には、私も賛成だわ？」

今回的事だけでなくても セレディー皇子の滞在で 何かと人員を割いている。

「ローズ」が襲われた原因は、王妃のお気に入りの侍女である事と、皇子の世話役という動機を踏まえるべきだと思つ。

あの時刻は、ちょうど王妃が通例散歩をしている頃だった。

そして、その直前まで、セレーティー皇子が、一緒にいたそつなんだから。

シャーリー達には、護衛の強化を申し入れたし……トッシュにも、無用心に城の中を歩き回らないように言つておいたのよ。

「珍しいな？

てつたり…………トッシュも容疑者の中に入つて、と思つていたんだが

ゴウリイの発言で、ナティアは、嫌そうな顔になった。

「実は、私は…………「ローズ」が襲われていたという時刻、セレーティー皇子とお供のトッシュと出くわしていたのよ。

皇子つてば、すついぐ顔を真つ赤にさせつて、頭を抱えていたの。

トッシュは、それを宥めていたみたいでね？

なぜか 私まで一緒に慰める羽田になつたのよ。

だけど すぐに……王妃の悲鳴が、王宮中に響き渡つたから詳しい事は、聞けなかつたんだけどね?」

「ミコアムは、血塗れになつて倒れていた「ローズ」の当たりにして……相当ショックを受けている。

今朝も 体の不調を訴えていたらしいが……」

「そうね、時期が悪いわ?

後……真名の所持について 話し合わなければならぬと想つたけど?」

含み笑いをして立ち去つていく妹に ゴウリイは、意味がわからなかつた。

「 」

「リ亞ム様……そろそろ、お部屋に戻りましょう?」

「のままでは、お体が休まりません」

リーンは、心配をつに 声を掛けた。

侍女の言葉に 王妃は、悲しげな表情を浮かべている。

その視線の先には、ベットの上に横たわっている「ローズ」が……

「ミリアム様…………「ローズ」は、大丈夫ですか？」

ナディア殿下も、おっしゃられていたではありませんか

シャーリーは、ニッコリと微笑んで ミリアムの手を自分の手で覆つた。

「けれど 「ローズ」は、田を覚ましてくれないわ？」

「わたくし…………怖いのよッ！」

お母様も、眠つたまま 「くなられてしまつたから…………」。

もしも 「ローズ」まで…………と考えてしまつたら

王妃の顔は、涙でグチャグチャになってしまつている。

そんなミリアム妃の様子に　侍女2人は、戸惑いを隠せない。

「ミリアム様？」

「ローズ」の事が心配なのは、十分承知しております。

ですが　「じ自分の御身にも気遣つて頂かなければなりません」

その言葉に振り返つてみると　ルチアが、仁王立ちになつていた。

「お母君が、生きておられれば　同じ事を申されるはずですッ！」

あまりに激しい剣幕だったので　ミリアムは、侍女2人に手を引かれ　そのまま部屋を後にする。

王宮内は、今までにないくらいに警備が強化されていた。

1人で敷地を歩く事は、固く禁じられ 特に王妃付きの侍女とセレディー皇子を含めたお供も 護衛がつけられているのだから。

それは、調査を続けているにも関わらず 「ローズ」が襲われた動機が、わかつていない為。

襲撃が発覚してから 1週間が経とうとしている。

けれど 犯人は、未だに捕まつていない。

襲つた人物を見た可能性のある「ローズ」は、意識が戻ることなくその警備も厳重にされていた。

見舞い客は、部屋に入る前にどの身分であろうが 持ち物検査を受ける事が義務付けられている。

それを行つのは、恐れ多くも 宰相閣下。

彼には、隠された物を見抜く能力があるので その任務を行う事に。

その為 本来の宰相の仕事は、代理として 妹のコーネリアが請け負つて いるらしい。

「宰相…… 『ローズ』の見舞いに参ったのだが」

どこかか細い声に 宰相は、無言で向き直った。

視線の下には、黒に金を縁取ったマントを纏つて いるセレティイー皇子が トッドと護衛を引き連れて立つて いる。

その姿を確認して 宰相は、少しだけ目を細める。

皇子が見舞いに訪れたのは、最初に運び込まれた時に駆け込んできただけだったのだから。

『ローズ』が襲われる直前まで セレティイーとトッドがいた事は、報告を受けていた。

中には、彼女の事を可愛がっていた者達が 皇子との騎士に対する不満が募つて いるらしい。

宰相自身 王妃が、倒れている「ローズ」を発見した時 妻と息子も居合わせたといふ話を聞いているので 心が穏やかではないのだか、

「 そうですか…………ぶしつけですが 持ち物を」確認をせて頂きます

宰相は、 そう言つて頭を軽く下げる

眼鏡を取る。

すると 瞳の色が、 虹色に変わり すぐに眼鏡を掛け直す。

「結構です、お入りになつて下さ」

その言葉を受けて セレディーは、 ゆっくりと中に入つていく。

「トッド……貴様は、 入らないのか?」

宰相の言葉を受けて 銀髪の男は、 肩を竦めた。

「野暮な事は、したくないんだ。

それに、「ローズ」殿が襲われたと聞いて、一番ショックを受けていたのは、皇子でもあるから

「なら、「ローズ」の手の甲にあるとこつ紋章は、まさか、ヤレディー皇子のものか？」

ナディア殿下の話では、問題ないと話しておられたが

その問いかけに、トッドは、頷く。

「皇子は、この滞在中で、本当に変わられたと思つ。

確かに、覚悟は、決めていたかもしれないが、それを本当に実行する為に、行動を起こし始めたのだから。

今まで、まだ迷いがあられたが、もう、それが、微塵もない

「あれだけの決断力を持つておられながら、王位継承権を放棄するということか。

そりや、覚悟がいるだろ？

だが……それは、いい傾向と言つてもいいだろ？

宰相は、苦笑しながら 閉じられた扉を見つめた。

「↙ローズ↘殿は、本当に この王宮で重宝されているようだ。

前に ナディア姫に 口説いていと凄い剣幕で勘違いされた事も  
あつたのだから」

トッドの眩きに 宰相は、" どうな？ " と、微かに笑う。

「↙ローズ↘は、あいつに似ているという事もあつて 陛下は、  
王妃様に彼女の事を話した。

その結果 侍女として召し上げられたんだ。

最初こそ 怪しいといつも多かつたが……今では、いて当たり  
前の存在になつてゐるのだからな？」

部屋の中からは、何かを押し殺したよつなぐもつた声が聞こえて  
くる。

セレーティーは、石のよつこに眠り続けている「ローズ」を見つめていた。

（ ）

（ ）

（ ）

（ ）

フラフラとした足取りで 近くへとよつていく。

落ちている手の甲には、自分が施した紋章が光っている。

「返事もせぬまま……旅立つてくれるな？」

そうなれば、僕は、どうすればいいのかわからないのだから

皇子は、悲しげな表情を浮かべて 眠つたままのローズの顔を指で  
触れた。

その動きは、微かに口感つている。

触れてしまえば、消えてしまうのではないか という恐怖がある  
ようだ……。

微かに触れる皮膚は、微かに熱を持っているので 生きている事  
は、わかった。

けれど 今の脳裏浮かんでくるのは、悲鳴で駆けつけた時に見た  
王妃は、侍女達に取り押さえられていたものの パニックに。

そして 地面に仰向けに倒れていたのは、**「ローズ」**。

服は、真っ赤に染まつており、背中には、剣で切り裂かれた痕が  
.....。

急いで 抱き起こした時の血の氣の失せた顔。

一緒に駆けつけてきたナディアは、悲鳴を上げて泣き叫んでいた王妃を押し退け、すぐに彼女の元へと駆け寄った。

そして、すぐに止血の術を施され、この部屋へ.....。

後で、王直々に話を聞いたところ、刺客は、捕まつておらず、動機も未だに定かではない。

「まさか、あの後直ぐに襲われただなんて……ッ！」

離れるべきじやなかつたんだ……なのに……なのに！

僕は.....僕は.....

言葉は、最後まで紡がれなかつた。

大粒の涙が、どんどん溢れてきて 話せる状況じゃなくなつてしまつたのだから。

「陛下……『ローズ』を襲つた刺客ですが、おそらく以前王妃を狙つた一派で間違いないです」

イリアは、真剣な表情を浮かべて言った。

「<影>を使って 探りを入れてみたところ  
焦っているようですね？」

まさか、**「ローズ」**が、意識不明のままで眠り続けているだなんて  
思いもしなかつたようですから

ニヤリと笑う第一騎士に 第一騎士兼宰相代理のコーネリアは、眉根を寄せる。

「そんな顔をしないで下さこよ。

連中は、刺客を使い「ローズ」を襲い、彼女を自分の思い通りの人形にするつもりだったのかもしれないわけ」

に。 イリアの報告に、コウリイは、”どういう事だ？”と、訝しげな顔

この場には、王と宰相代理と騎士しかいない。

王妃は、体調が著しくなく、自室で療養中。

宰相は、<sup>△</sup>ローズ<sup>△</sup>の部屋の前で警備中らしい。

「つまり、連中は、王妃や皇子に一番近づけるであろう<sup>△</sup>ローズ<sup>△</sup>を駒に入れようとしたという事です。

王妃のお気に入りと皇子の世話役が、同一人物なんですから、奴等に取っちゃ、仕事遂行に役立つと思ったんじゃないんですかね？」

「人形…………って、まさか、意識を支配して、暗殺を実行させる為に？」

「じゃあ、ミコアム様とセレーディー皇子のどちらも、狙われたって事ですね？」

また、警戒態勢を強化しないと…………。

以前の事もあるんですから、「

コーネリアは、溜息をつきながら、呟く。

「また 連中が、動き始めたとなると…… タイミングが悪いな？」

隣国の動きが、怪しい時に……」

ユウリイの言葉に イリアも、心なしか複雑そうな顔になつた。

「本当に申し訳ないです。

ミイナが、身重な状態じゃなかつたら…… 王妃に護衛が、完璧だつていうのに！」

「いや も前が、悪いわけじゃない………… 「いえ イリアが悪い」

王の言葉を遮つて ローネリアが、厳しい口調で言い放つ。

「ミイナは、最初 全くイリアを相手にしていなかつたのに…… あんなにじつじく言ひ寄つたりしてッ！」

異性に対する免疫が、皆無だつたミイナに取つたら アンタは、危険人物だつてつていうのに！――

ミコアム様の計らいもあつて 結婚は、認められたけれど 一番

重要な時に お傍で護衛できなくしてしまつだなんてッ！」

「リア…………お前が、ミリアムの事を大切に思つてくれてゐる事は嬉しいが 別に、イリアを責めているわけじゃない。

確かに ミイナ達は、王族を守る為だけに育てられた。

だが その人生までも 縛り付ける権利は、我々にはないんだ。

それに 宰相だって リーンと結婚しているじゃないか。

しかも…………ちゃんと後継ぎまでいるんだからな？

シャーリーだつて 最近、相手が見つかつたらしいぞ？

人の人生は、誰かに決められたわけじゃない

「シコリと微笑む様子に ローネリアは、押し黙つてしまつ。

顔では、笑つてゐるが この王には、それに反論させない力をちゃんと持つてゐるのだから。

「とにかく 今のところは、連中も下手な動きをしないでしょつ。

「ローズ」が目を覚ますまでは…………何もかもが、予想できずにいるんですからね？

これだけは、ご覚悟願いたい。

もしも 意識を取り戻した時……「ローズ」の意識が、連中に支配されていた場合 僕達は、彼女を斬ります」

いつになく真剣な口調の男に 女騎士も、唇を噛み締め 頷いている。

2人の反応に ユウリイは、苦渋な顔で ”好きにしろ”と、答えるしか出来なかつた。

（ ）（ ）（ ）

「何だか……厄介な事になつてやしない？」

鉄砲玉を追いかけてきたら こんな事になつているだなんて「

フードを被つた女は、深く溜息をついた。

「いや 好都合だ。

標的が、こんな場所に足止めを食らつているんだから。

しづらくは、潜入しておいた。

何か起ころる前に 全てを済ませるべか?

同じく闇色のフードを被っている男は、答える。

「だけど……警戒態勢は、強化されるみたいだし。

ちよつと 危なくない?

あいつの話じゃ……どいつもともなく 噂が流れ始めていたりしない?

本当に上手くこくのかしら?」

「何だ……弱音を吐くのか?

お前らしくないじゃない。

あの人には似て……何を考えているのか 全くわからない時があるの?」

男の発言に 女は、鼻を鳴らし そっぽに向ってしまった。

「あら……それは、貴方も同じ事なんじゃない?

他のみんながつて 何かしら 似通つている部分もあるんだから」

「おいおい……拗ねるな。

お前の心配している事なら問題ない。

俺達には、「コレがあるんだからな?」

男は、やつ置いて マントの中から水晶玉を取り出した。

「これが ある限り 王宮のみんなには、悟られる事がない。

勿論 正体も、バレないはずだ。

この王宮内には、これを俺達に託したあの達に敵つ人物が まだ  
いないのだからな?」

男は、ニヤリと笑う。

その表情は、月明かりが逆光になつていた為 わからなかつた。

「けど……田をつけられる可能性もあるんじゃない?

警備体制が、強化された事で 少しでも怪しい素振りを見せれば  
命取りになる可能性もあるし」

「まあ 事と次第によつては、あの人に協力を仰ぐ事も考えている  
けど。

さつき あいつの定時報告によれば 今のところ 変な風に話が  
進んでいるわけじゃないらしい」

「なら いいんだけど?」

あの間接的に協力者になつてくれた子の話じゃ……脅迫文も内容  
を増してきたそうだから 行動を起こすのも、早めにした方がいい  
のかもしれない」

「イリア様…………何だか、ご機嫌ですね？」

ぶしつけな言葉を受けて 口笛を吹いて廊下を歩いていたイリアは、振り返った。

そこには、銀のお盆を手に持っている下働きの少女が。

男は、その姿を見て あからさまに 溜息をつく。

「何の用だ、シャルロッテ。

お前は、自分の持ち場についていろよ？

「ローズ」の襲撃で それでなくとも 厳重体制が、敷かれているんだからな？」

「勿論 わかつているつもりですよ？

だけど いつの身にもなつて頂きたいな～？

思春期なのに 田の前では、兎がウサウサ……」

物思いに耽る姿は、男ならば 誰もが抱きしめたくなるだろ？。

けれど イリアには、妻がいるのと同時に 目の前にいるこの少  
女の姿をした悪魔には、そんな感情を抱く理由はない。

「その分 物に当たつているんだろ？」

この前も ルチア女史から、苦情を聞いた。

お前を なぜ殺さずに潜入させているのか ちゃんと理由を話  
したはずなんだがな？

それとも 僕の率いる「影」から抜けるか？」

男は、少し悪戯っぽく 笑った。

「何言つてるの？！」

居場所なんて とっくに無くなつているつて事くらい アンタだ  
つて知つていいでしょ？

元は、親に売られ 男とも女とも相手できるように仕込まれ……  
拳句には、その技で刺客として育て上げられた。

それで ミコアム王妃の暗殺の為に王宮に送り込まれ 任務は、失敗。

まあ あつひには、アンタの奥さんを含めた護衛がいるって事を知れた事だけでも マシな結果だったんだるうけどいね？」

「だが お前と戦つ駒を失つた事は、痛手だと想つが？」

「影」に引き込んだのは、確かに俺だが お前の技量には、いつも驚かされるからな？」

だが 情報提供は、もつたじぶらすこ 逐一知らせてもうこりこりこ

イリアは、呆れたように 溜息をつく。

「何だ……まだ怒つてたの？」

セレディー皇子のお遊び。

まあ…… ッチは、誰にも知られたくないようだったけどね？」

前に会つた時も、すぐに気が付かれたみたいで…… すつじこじで睨まれちゃつたんだから」

「そりや……俺も 女装して王宮を練り歩きたくなんかないな？」

しかも あいつの姿勢は、田立つからなあ～？

美人が睨むと 恐いぞ？」

イリアは、昔 共に背中を合わせあつていた友人を思い出す。

「だけど やつを……忠告してきたよ。

お遊びもいいけど 少しは、周りの事も考えるよいにね？

そうしたら 意外にアッサリ……素直だつたつけ？

まあ……アッシュは、すこい心配してこむよつだつたんだけど

シャルロッテは、見た田こそ可愛らしげに 首を傾げてみせる。

イリアは、その仕草に溜息をつきながら 天井を見上げた。

「セレーディー皇子は、誰よりも王族さ。

まあ……我が君主には、負けるだらうけど

「ハハハ…………そこは、買いかぶつているんじやないか つて

言いたいところだけじや？

現に 自分の奥方の命を狙つた刺客を、秘密裏に処刑した事にして  
新たに生きる道を与えるだなんて ちょっとやそっとの覚悟じ  
や、出来ないと思つけど？

だつて 普通なら…… 不穏因子は、絶つべきなんだからさ？

でも あの王は、それをせず…… 違う人生を与えてくれた

「ゴウリイ王は、憎しみが繋がる事の哀しみを知つてゐるからな？

俺の奥さんのミイナや他の特殊部隊のみんなも 色々な事情があつ  
て…… 他に拠り所がなかつたつて聞いてゐる。

だけど 王の心を知つて 忠誠を誓つ事を選んだんだ…… 勿論  
俺もね？」

男は、真剣な眼差しで 視線をシャルロッテに返した。

琥珀色の瞳は、天井に輝く灯りが無くとも その輝きを失わない  
だろ。

「他の国では、この国が何て呼ばれているか 知つてゐる？

どんな罪人でも受け入れる 偽善者の国。

少しでも同情心を見せれば 刺客を送り込むのは、簡単な事だつてさ?」

悪戯っぽく発言する少女に イリアは、鼻で笑つた。

「王は、そこまで甘い考えをしない。

確かに 道は『える。

だが 再び襲い掛かつてきた時は、容赦が無いからな?

前に 生まれた時より 毒を飲み続けた事によつて 毒を発する体質になつた女が、侍女として送り込まれてきて 宰相兄妹の母上殿が、殉死されたと聞く。

実は、その女に妹がいて お前が「影」に入る前 刺客として王宮にやつて來た……姉と同じく、毒体質でな?

そして 結局は、ミイナによつて阻止され 捕縛された。

王は、新たな生を歩む覚悟はあるかと問われたが……あの女は、一瞬の隙をついて 王に襲い掛かつたんだ。

まあ 僕と「一ネリアが、出るまでもなく 王の手で手打ちこなされたがな?

「ウーリィ王は、優しく見える…………ただ それだけだ」

「それは、この王宮の皆も同じ事でしょう?」

新参者も まるで家族のよつて受け入れるだなんて 普通、聞いた事がない。

「…………そろそろ 仕事に戻らないとな?」

シャルロッテは、そう言い残すと 笑顔で立ち去つていった。

わたしは、一体 どうしてしまったの？

「ローズ」は、何かに漂う感覚に陥りながら 考えていた。

辺りを見回してみる限り 色が全くない。

なぜ そう思ったのかは、全然わからず。」

見渡す限り 田の前には、霞んだものしか広がっていなかつた。

ただ 自分の姿だけは、わかる。

服装は、清楚なワンピースで その色は、綺麗な淡い海の色。

手首には、薔薇の宝石のあるシルバーリングが……。

何だらう……懐かしい気がする

なぜかは、わからないが そんな気がしてきた。

頭に触れてみると 髪の毛は、綺麗に纏め上げられている。

「 確証はないが、見事なまでに「一ツ一ツ三つ編みを施され 上げられているらしい。」

ふと 手の甲にある薔薇の紋章を見つめて ハツと口を開く。

「何だか わたしが、わたしじゃないようすね？」

溜息をつきながら 「ローズ」は、溜息をついた。

「けれど」 ここは、どこなの？

わたし……………中庭で……………斬られた筈。

それに 何でこんな姿をしているのかしひ……………

状況が、掴めず 「ローズ」は、ワンピースに触れ クルリと回つてみる。

それは、じいが、君の夢の中だからだよ

どいからともなく、声が聞こえてきた。

急いで振り返ってみたものの、先ほど確認した通り、誰もいない。

今の姿は、記憶を失う前、君が普段着飾っていた姿

その言葉に、  
「ローズ」は、息を呑んだ。

「着飾る……つて、それ相応の身分だつたつて事?!

ルチアさんが言うには、わたしは、それなりの上流貴族に適応する礼儀作法が身に付いていると言っていたわ?

わたしは、記憶を失つてしまつて、いるから、どういう事なのかは、全然わからないのだけど……。

あなたは、知つているという事なのよね?

その問いかけに、声は、微妙に苦笑して、いるようだつた。

そんなにせっかちにならないで？

君は、まず 時間を置くべきなんだ

「どういつ事なの？」

わたしは、突然 刺客に背後から斬りつけられたよつだつたけれど  
…………それと関係があるの？」

あるよ。

連中は、君の中に別の人格を仕込んだ。

君は、まず それを追い出してもらわないといけない。

そうでなければ その人格は、彼らを害する存在だから……  
…君は、殺されるだらう

物騒な話を聞いて <ローズ>は、顔を真っ青にさせてしまつ。

「じゃあ……あの斬りつけてきた誰かが、わたしの中に変なのを  
入れたつて事なの？」

つていうよつ……なぜ、そんな事に？！

その刺客は、捕まつたの？

捕まつていな！

それ以前に 誰が、刺客なのかもわかつていない状況なんだからね？

まあ……厳戒態勢は、強化されたみたいだけど

どこか 吞気な言い草に ヴローズは、思わず叫びそうになつた。

けれど ディレーラのかもわからぬ相手に どう叫べといこうのだろう？

王達は、君が考へてゐる程 甘くないから 心配はいらない。

君は、この国に來た目的を 1つ果たしたんだから

その声に ヴローズは、”どういふ事？！”と 叫んだ。

「わたしが、この国に來た目的？！

どうして……ただ 侍女をしていただけで 目的を果たしたとい

「う事になるの？」

ちょっと、短いです。

本来ならば 王妃が、その刺客に襲われるはずだった（「え？」 〈ローズ〉）。

そして 王妃には、別人格が生まれてしまい 国は、廃れていく。

いくら 敵の手に意識が落ちてしまった存在でも 王は、王妃を手に掛ける事ができない。

勿論……連中は、王妃の周りにいる護衛にも 同じ攻撃を仕掛ける

「ちよっと、待つてよ？」

それじゃあ……わたしは、ダレなの？

〈ローズ〉の質問に なぜかは、わからないが 声の主が、ほくそ笑んでいるように思えて仕方なかつた。

まあ……それは、後のお楽しみかなあ～？

今 僕が話せるのは、これだけだから。

さあ 今は、別人格を追いかけないとね？」

一応 彼らが、下手に直ぐ意識が浮上しないように 呪を施して  
くれているから

「彼ら…………って、そんなに信用できるの？」

大丈夫。

記憶を失う前の君の 最も信用していた存在だから。

そして 君が、記憶を代償に この国を訪れた事を、少なからず  
嘆いている。

なぜかは、わかるかい？

「もしかして 何の相談も無しに 行動を起こしたから？」

成る程…………自覚は、あるみたいだね？」

苦笑しながら 言われてしまったので ヴローズは、膨れつ面  
になってしまった。

自分には、声の相手の姿が見えないが　彼には、自分の姿が見えるらしい。

そんな顔しないで？

折角の顔が、台無しになってしまつよ？

そう言い残すと　声は、何度も耳を傾けてみたが　聞こえなくなつた。

「ローズ」は、どうしたものか……と、息をついてから　とにかく歩き出す。

「依然として、クローズは、意識を取り戻す気配がありません」

ナディアは、白衣姿のまま 王の間に入るなり 一いつ告げた。

その報告を受けて ゴウリイは、頭を抱えてしまう。

「UJのままでは、いかんのだがな？」

本当に……どうすればいいのか

悲しんでいる兄の様子に 妹も、言葉が見つからない。

この場に控えているのは、第一騎士と王妃付きの侍女の一人 リー  
ン、……そして王宮医師のナディア殿下。

「……ですが、着替えさせる役の侍女の話で ちょっと不可解な  
話を聞いたのですが」

リーンの発言に一同は、目を細める。

「意識が戻る気配はないそうなのですが……深い夢の中で、何かを探しているやうなのです。

私は、実際に目にしたわけじゃないのですが、深い夢の中で、何かを探しているやうなのです。

「それって、『ローズ』が記憶を失っているのと、関係があるって事かな？」

「だつて……記憶が、全く無いなんて、通常は、ありえないから。何かの代償にしているんじゃないかな？」つて、考え始めていたところなんだけど」

イリアは、真剣な表情を浮かべて、呟く。

「代償……？」

まるで、契約したかのやうな話ね？

確かに、薔薇の痣は、そつちに部類じや、関係あるかもしないけれど……。

でも、アレは、そんな負の感情はなかったわ？

「……………」  
「……………」

ナギアは、訝しげな顔になつた。

「『影』から 何か報告は、あるか？」

王の言葉に イリアは、天井を見上げて 指を鳴らした。

すると その場に 鮎色の髪をした少女が、ふんわりと飛び降りてくる。

「『報告しますね？』

今のところ 王宮内に 不審な動きをする輩は、いません。

まあ 『ローズ』の一件がありますから…………みんな 大分心配してこますけど」

「ロッテ…………まさか 貴方は、こんなにも馴染んでいるだなんて 未だに信じられないわ？」

「アンタに殺されかけたつていうのに」

ナティアは、溜息をついて 言つ。

「ハハハ…… そんな警戒しないで下さい。

今は、無力な新米侍女なんですか」

シャルトツテは、ニッコリと微笑んだ。

その笑みに 誰も突つ込みいれない。

話が進まなくなつてしまつことを、理解しているから。

「今のところ ヴローズを襲つた可能性のある連中は、身の振り方を考えて 潜んでいますね？」

彼女が田を覚ますまで事が起こらないといつていう イリア様の考えは、当たつていると思いますよ？」

まあ…… 田が覚めた時 どうなつているのかは、予想不可能なんだけど」

「何か その潜む者に動きがあれば？」

ゴウリイは、真剣な顔で問ひ。

「すぐに察知できるよつ 呪を仕掛けました。

少しでも動き出せば 察知できます。

けれど これだけは、ゴツ承願いたい。

今回ばかりは、今までのよつに 秘密裏に処理できないかもしだれな  
い

シャルロッテの断言に 王を含めた面々は、歯を噛む。

「だけど 王妃も運が良かつたと思つ

先ほどの真剣な口調と打つて変わって 茶化すよつて言ひつゝ影への  
一員に イリアは、侍女を睨みつけた。

「この国で黒髪なのは、ミリアム王妃とローズのみ。

外の国の連中は、記憶を失った女が 侍女として しかも黒髪だ  
なんて、知られていると思う?

それに 王妃の脱走癖は、隣国にも伝えられて程 有名な話題。

「ローズ」が王宮に上がる前までは、何度も それを見越したかの  
ように 刺客が送り込まれた」

その言葉に 一同は、愕然としてしまつ。

「リーン…… 前に 侍女の話題になつていたよね？」

「ローズ」と王妃は、背丈も似ているから 同じ格好をして 後ろから見れば 見分けが付かないかもしない つて」

その問いかけに 皆の視線が、金髪の侍女に集中する。

「ええ その話題は、前々からあつたわね？」

「だけど 本当ならば ミリアム様が、『ローズ』のように斬りつけられていたという事なのかしら？」

いつも穏やかな顔立ちからは、殺氣が立ち込めていた。

シャルロッテは、「うまでも切り替えが可能なのか…… と、唾を飲み込む。

「多分…… その可能性が、高い。」

セレーティー皇子を狙う可能性も 捨てきれないけれど……王妃の意識を支配してしまえば この国は、破滅するだろ？からね？

だけど 失敗した事は、連中も自覚しているのに 仕掛けてこない

「つまり その意識を乗っ取って人形にするっていう術は、相当な時間を要して成り立つモノって事？」

ナデイアの言葉に シャルロッテは、”その通り”と、息をつく。

「まあ 監視は、続けますよ。」

だって あいつらには、何かと借りがありますからね？」

「無茶はするなよ？」

イリアは、指を鳴らしている少女の頭をワシワシと掴んだ。

シャルロッテは、膨れっ面になりながら その手を振り払う。

「旗から見ていると 初々しい恋人のようですね？」

「マイナに報告しておきましょうか？」

リーンは、朗らかに笑みを浮かべた。

「止めてくれよシ！」

男相手に 恋人なんてありえないだろう？！

しかも 女装が趣味な！！」

顔色を変えて叫ぶイリアに 少女は、目元をヒクヒクさせる。

「別に趣味ってわけじゃありませんってッ！」

体格的にこつちの方が、潜入しやすいだけで…！」

「うーん……周りが、何にも見えないのに、どうやって探せばいいのかしら？」

「……が、わたしの夢の中だと呟つのなら、書えたものが、魔法の呪じゆ文もじで出てきてもいいのに」

「ローズ」は、途方に暮れてしまっていた。

田の前に立、やはり 霞だけしかない。

「あの声は、わたしが どこの誰なのかを知っているようだったわ？  
もしかして その誰かを捕まえたら……教えてくれるかも……」

「ローズ」は、真剣な表情になつて 拳を握り締める。

そして 手の甲に見える薔薇の紋章に視線を向けた。

「後……セレディー皇子の真意を確かめないと。」

よくわかんないけど まるで…… 求愛の印みたいで 恥ずかしか  
つたんだよね？

前に リーンちゃんとミイナちゃんと プロポーズの話題を振った時  
手の甲をやたらと撫でてたもん。

訳もわからなくしていたんなら ちゃんとそれを改めてもらわないと…… せこら中で女の子達が、大騒ぎになるもんね？

だつて 音は、とっても真面目な第一皇子様なんだから

「ローズ」は、息をついて両手を頬に触れてみると 異様に熱  
を感じる。

考えただけで 真っ赤になってしまったのかもしれない。

あの真剣な眼差しを思い出すと ある期待をしてしまつたのにな  
つてしまつたのだから。

「セレーティー皇子の決意は、とても素晴らしい事だわ？

だつて 普通は、王族である身分を捨てよつだなんて 考えない  
はずだし。

それにもしても ハッド様も、『存知だつたのかしら？

皇子が、『自分の身分を返上するところの覚悟を……』

「へローズ……ずっと田を覚まないのね？」

栗毛の巻き毛を靡かせた 少しお腹の出ている女性は、哀しげに  
眠り続けている「ローズ」の手を握った。

彼女は、王妃付きの侍女の一人 ミイナ。

今は、妊娠を控えている為 一線を引いている。

「本当は、ミリアム様が狙われた可能性が高いと伺ったけれど……  
…」の事 あの方は、ご存知なの？」

その問い合わせを受けて 同じ部屋にいるシャルロッテは、肩を竦め  
てしまつ。

「お知らせしたら お体に悪い。

それだけでなく 最初に 「ローズ」を発見したのは、王妃  
様達だつたんだから。

リーン達の話だと ルチアのお陰で…… 食事だけでも 取つても  
らえているそうなんだけどね？

やつぱり 食べ物が、喉を通らなくなつてきているみたいで「

その話を聞いて ミイナの表情に翳が。

「↙ローズ」には、彼女の初めての休暇の時 ネオに紹介されたわ？

本当に驚いたの。

彼にソックリだつたから…………」

「それは、イリア様達も言つてた。

実際に会つた事は、なかつたんだけど 王妃の兄上つてどんな人  
だつたの？」

不思議そうな顔をしている シャルロッテに ミイナは、微かに  
目を伏せた。

「アーロンは、とても腕の立つ剣士だつたわ。

それこそ 陛下の第一騎士になる人材だつたから。

温厚で 誰にでも優しい…………そして、守るべく者を持てる力を駆使して 戦う方だった

「聞いた話じゃ…………自らの命を顧みず この地に眠っていた神を自分の命と引き換えに 目覚めさせたそうだけど?」

「ええ 誰もが あの時は、敗北を覚悟した。

国が滅ぶのならば 自分達も…………ってね?

けれど アーロンは、最後まで諦めなかつたのよ。

詳しきは、知らないんだけど トップも 実は、一枚咬んでいて何かの代償を払つたらしいわ?

当の本人は、国を逃げ出した罪人として恨まれた方がいいからつて…………知つてるのは、ごく少数なんだけど。

勿論…………ナディア殿下は、ご存じないわ?

知つていたら あんなに 彼を責められるはずがないから

ミイナの何かありげな発言に シャルロッテは、首を傾げる。

「もしかして…………ナディア殿下って、そのアーロンつ人の恋人だ

つたわけ？

あんなに美人なのに 浮いた話 全然 ないもんね？」

「確かに お似合いの2人だったわ？」

その前での戦争において アーロンは、  
「迅速の騎士」の称号を  
王の前において与えられていたから。

ナディア殿下との身分も 問題ないはずだったの。

まあ……アーロンは、妹命みたいな性格だったから 殿下のお氣  
持ちに気が付いていなかつたかもね？」

「うへん……後 気になるのは、やっぱり トッヂとの関係かな？」

ナディア殿下が怒っているのは、単に あの銀髪ヤローが、国を捨て  
て逃げ出した臆病者っていう認識からだけじゃない気がするんだ  
けど」

ミイナは、少女の問いかけに 息をつく。

「トッヂとは、最初から 衝突が絶えなかつたのよ……殿下は

うちの人も ある意味 よくわからない性格をしていたけれど  
トッヂは、とにかく始終無言でしょう？」

だけど……剣の腕は、アーロンに遅れを取らない実力者だった。

流れの傭兵として 様々な危険な場所に仕事を重ねてきていった事も  
あって 知識もあつたわね？

殿下は、それの全てを否定なさつていたけれど……

「単に 一目惚れしたって事？」

だけど 初恋の人が、実力で負けるはずがない…………ってね？

そんでもって 相手は、国を裏切つて いるから その感情は、あ  
つてはならないもの。

だから あんなに厳しいわけだ

シャルロッテの納得の言葉に ミイナは、” そういう事よ ” と、  
苦笑。

そして 無意識に お腹に手を当てて いる。

## 話し合い

「具合は、どうだ ミコアム」

「大丈夫ですわ。

そんな風に 真面目な顔をしていると らしくありませんね？」

ユウリイは、その言葉を受けて 言葉を詰まらせてしまった。

ミコアムは、そんな夫の反応に 面白そうに微笑んでいる。

「貴方は、真面目な顔をなさるよりも そういう情けない顔の方が似合っています」

「それは、誉められているのか？」

「何だか……そりは、思えないのけれど」

王は、どこか複雑そうな表情を浮かべて ベッドに上半身だけを起している王妃の横に座った。

今更の部屋にこるのは、ミコアムとコウリイだけだ。

後の者には、部屋の外で待機させている。

どうしても……話せなければならない事があるから……。

皆は、そのコウリイの覚悟に気が付いているのか 部屋を下がる時、相当 心配そうな顔をしていた。

ミコアムも、何かを悟っているのか 溜息をついてしまつてこらし。

「陛下…… 最初に申し上げますが 真名は、わたくしが持つてありますわ？」

これは、歴代の王妃の務めなんですが……」「だがッ！」

「ミコアム……君の今の状態は、とても危険なんだぞ？！」

確かに 王妃は、王の真名を護る。

だが 自分の体の事も考えて欲しいんだ……。

「ローズ」の一件で……君は、相当 ショックを受けてしまつて

いたぐりへ。」

その言葉に、王妃は、今にも泣き出しそうな顔になってしまつ。

「もしかしたら……あの子は、わたくしと間違えられた可能性もあるのじょ？」

みんなは、隠し事が嫌いですから 教えてくれました

唇を噛み締めていた妻に、王は、長い三つ編みになつていて黒髪を手にittて 口付けを落とす。

「刺客については、イリアが『影』を使って 探らせてくる。

今は、とにかく 互いに冷戦期間だ。

ミロアム…………君は、今が一番大切な時期なのだから ゆっくり休まないと

「ええ…………『ローズ』が田を覚ますまでの間じょ？」

万が一、あの子が正氣を失つていれば 斬り捨てられてしまつうのね？

わたくし…………どうしたらここのかじら？」

「ナデイアが、過去に起こった事例を探し出そうと 皇子やトッドと一緒に躍起になっている。 セレディー

真名を護る王妃を 連中は、長年に渡り 意識を乗っ取ろうと様々な手段を取つてきたりしないからね？」

王の言葉に 王妃は、小さく俯く。

「アーロンお兄様なら……どうなさつていたかしら。

「ローズ」を救つには、どうしたんでしょう」

「ああ……彼なら 「ローズ」にとつて一番安全な策を考えられていただろうね？」

勿論 誰も損しないやり方で。

まあ……アーロンは、人を驚かせる事が得意だったから 全てを種明かししてはくれなかつただろうけど」

夫の言葉に 妻は、目を伏せるのみ。

「大丈夫だ……ミリアム。

「ローズ」は、絶対に守るから。

君は、俺の真剣とお腹にいる新しい命を守つて欲しい

ミコアムは、コウリイに抱きしめられながら言われた言葉に 泪を  
流す。

「承りましたわ、陛下」

王妃の答えを聞いて 王は、満足そうに微笑んだ。

それを見越したように ドアがノックされた。

「陛下…… イリアです。

無作法かもしけませんが お話を聞いて欲しいんですけど

イリアの声は、どこかいつもの茶化す色が含まれていない。

その声色に コウリイは、少し戸惑つたが 妻の真剣な顔を見て  
”入れ”と 許可する。

「王妃…………寝所への乱入をお許し下さー」

イリアは、真面目な口調で頭を垂れた。

「それ相応の緊急事態が起ったというわけなのでしょう？」

お詫びして

ミコアムの言葉に第一騎士は、頷く。

「老師が、この国に入り込んでいる」

（ ）（ ）（ ）

暗闇の中 一つの影が、微かな光をも避けながら 駆けていた。

その足取りは、風のよじで 全てを薙ぎ払っていく。

影が通つた場所は、黒ずんでいき 花々も枯れてしまつ。

ふと 影が足を止めた。

何かと鉢合わせたかのように 立ち止まつているらしい。

「中庭にいる黒髪の女を襲つようつ命じたのは、アンタだね？」

あの子の背中の傷は、特別趣向の太刀だ。

まあ 何を勘違いしたのか…………標的だつたはずの王妃ではなく侍女が倒れる事になつてしまつたけれど

「確かに 予想外だつたが…………計画に支障はない。

あの娘が田を覚ませば…………何もかもが上手くいくだらうからな？」

だが ずっと お前の行方を探していたのに…………どこにいた？」

低い声が、どこからともなく 聞こえてくる。

その声に 影は、小さく息をつく。

「ずっと 死んだと思っていたんじゃないの？」

死体も晒されていたのだから…………

「あの王は、思つたよつも…………我々の存在に早い段階で氣が付いたのでな？」

お前を捨て駒にするしかなかつた。

この生業をしてこる以上…………全てを失つわけには、いかないのだよ。

我々は、家族なのだからね？」

「そりやあそりだ。

なり手は、いくらでもいるんだし？

だからこそ、捨て身の技を仕込むわけでしょ？

戦争で家族を亡へした子や世界に絶望した子供。

色々な闇を植え付けるのが、アンタのお得意なんだから」

「お前は、我々を裏切つたな？」

生きる」と絶望していたお前に居場所を『えた 我を……」

声は、さうして底くなつてこぐ。

「IJの老師を裏切った罪は、その身を切り刻んでも 足りん。

お前の所業によつて 多くのお前の兄弟達が任務を失敗し……処刑されたのだからな?

なのに なぜだ?

貴様は、なぜ……生きている?」

その声に 影は、何も答えなかつた。

いや 答えられないのだ。

「お前が、のうのうとのこの国で生き残つてゐる中……お前が、兄と慕つていた者は無様に標的の騎士に首を撥ねられたぞ?」

お前を慕つていたあの娘も、夜伽と偽り寝首を搔ひつとしたのに辱めを受け……そのまま殺された。

中には、晒し首として……標を上げられた者も大勢いるぞ?

貴様は、それを聞いても まだ 恥じだと思わんのか?」

「何が言いたいわけ?」

確かに まだ闇のそこにいた頃は、それを恥じて死を選んでいたかもね？

だけど……守りたいと思つた。

その存在が出来たから……この国を守りたいと思つたから。

ただの刺客だつた頃は、いつも虚しい事ばかりだつたけど 今は、ちゃんと充実しているの。

だから 邪魔はさせない

「それがお前の決意か……」

声は、どこか皮肉を嘲笑つている。

ザツザツ……と背後で 何かが揺れた。

影は、瞬時に振り返りつとしたが 次の瞬間 目の前の光景が、歪んだ。

「…………しまつた…………」

後悔と共に 意識は、そのまま闇の中に消えた。

「さあ……君は、戻りなさい。

このシャルロッテの代わりに……

その言葉を受けて フードの中から満面の笑みを浮かべた 少女が  
顔を出す。

「兄上……どうなさいたのです？」

ずっと、黙り込んでおられたようですが、……」

その問いかけに、男は、不機嫌そうに顔を上げた。

「珍しいですね？」

兄上が、そのような顔をなさるだなんて、……何時以来でしょうか？」

「陛下……御自分のお立場をお考え方でござませ。

我は、一臣下です。

そのよつこ お言葉をお掛けなさりますな。

古くからこる者は、何も申し上げませんが、他の者の混乱を招く可能性があります」

切り返しこ 少し着飾つてゐる男は、悲しげに肩を竦めてしまつ。

その表情は、どこか寂しい。

「昔は、もつと親密でしたのに……何だか寂しいですよ。

確かに 私は、王になりました。

でも 貴方の弟である事には変わりありません。

なので……そのように他人行儀をしないで下さい。

これは……これは……王としての貴方への命令ですッ！」

どこか戸惑いを隠せないままの強気な発言に 男は、小さく息をついて ”わかった、努力しよう”と、苦笑する。

「だが……それは、プライベートの時だけだ。

公務中は、今までの態度を貫かせてもらつ。

でなければ 他の者達に示しが付かないからな？」

「兄上は、変なところで周りの事を気にしていますね？」

まあ……幼少時代が、特殊でしたから 仕方ありませんけど。

それで？

まだ……奥方は、『」実家から戻られていませんですか？

何でしたら　お迎えに行つてもよろしこと懇こますよ？

いつも　働きあざれのところに仕事をこなしていくのですから  
誰も文句が言えません。

みんな……貴方が働きすぎだと嘆いていましたよ？」

「反対に……戻つてくるなと泣かれるかもな？」

みんな、不甲斐なさ過ぎる。

あれで、よく……今まで国を守る位置についていたものだ」

その発言に　王は、吹き出した。

「まあ……それは、同感ですね？」

貴方を当時　守っていた騎士は、あまりそういう場に踏み込もうと  
していませんでしたが　兄上は、色々と想ひつけることがあるようだ。

けれど　兄上の扱きで　軍の力が増していることは、確かです。

みんな……素晴らしい隊長を得たと喜んでおりましたよ？」

「ちまたでも 貴方の業績は、留まるところなく噂になっていますからね？」

「その反面では、妻に見放されたと囁かれているのも知っているぞ？」  
かの国の皇女は、本来ならば お前の妃になるはずではなかつたのか？……とな？

彼女も 元より、そのつもりだつたよつだし…… 僕を見るたびに睨みつけてきていた

「だつたら 本当のことを話してしまえばいいんじやないんですか？」

そうすれば 誤解も解けるはずです

「アレが、 そう簡単に俺の話に耳を傾けると思つか？」

「…………俺の存在そのものを無視するよつになつてこるといふのヒツー！」

娘を出産してから 更にそれが増した。

今回も、あらわの王と王妃が取り成さねば…… 手紙も送るつもつないだら？」「

男が、悪態をつべと 弟は、一ヶ「コ」と微笑んだ。

「本当に愛しておられないのなら 奥方は、ずっと兄上の傍におられないかたと思いますよ？」

今回の家出の原因は、何だつたんですね？

前は、兄上が仕事ばかりに身を寄せているからとこつのが理由でしたか……」

弟の発言に 臣下は、小さく息をついた。

「呼んでしまつたらしいんだ……彼女の名前を。

「ローズ」 とな？

そしたら その翌日……アレは、手紙だけを残して 娘と一緒に、実家に戻ってしまった。

何でも…………寝言で彼女を呼んでいたらしい

兄の告白を聞いて 若き王は、開いた口が塞がらない。

「僕も 王妃に女心がわからないのかと何度も罵られますけど……  
兄上の言動で奥方が怒っている事は、丸わかりですよ？」

当たり前じゃないですか……自分の夫が、自分とは違う女性の名前を出せば 誰だつて……」

「わかつてゐるさ……そんな事、お前に言われなくともな?

午後から あちいらに向かうつもつだ。

一筋縄でいかないことは、わかつてゐるから 王や王妃方にも協力してもらつつもりだしな?」

「その間は、騎士団のみんなは 骨休みですね?

まあ……兄上が帰つてきた後の恐ろしさを前回の一件で身に染みてこるでしょから 鍛錬は、欠かさないはずです

「その心配は、要らない。

今から連中に抜き打ちの体力測定をしよう。

俺が休暇中に どれだけ今日から進歩できているか 楽しみだ

満面の笑みを残して 男は、立ち去る。

部屋に取り残された王は、兄の様子に苦笑しながら 兵士達に心か

ら同情の念を送り 異国にこしの義姉の事を頭に思い浮かべた。

再び、この城に戻つてこられますよ」と。

ある - 亂して（後書き）

誰と誰の会話なのかは、最後の方で明かしたいと思います。

最初に違和感を感じたのは、幼いコルネオだった。

口では、上手く説明できないが、何かがおかしい。

「ねえ………ぜつたいに おかしいよ?」

コルネオは、懸命に母のローンに訴える。

「こつものロッテじゃない。」

なんだか おかしいんだよ?」

涙目になりながら話す我が子に、母は、戸惑いを隠せない。

そして 苦渋な中で考えた末 他の侍女達に相談もせず 眼を張る事に。

これは、危険な賭けかもしない。

だが 我が子の直感を鵜呑みに出来ないのだ。

決して、自分の子供に対する蠱頃ではなく その能力を知つてゐるからこそその行動。

「シャルロッテ…… ちょっと、いいかしら？」

不自然にならないように声を掛けると シャルロッテは、すぐに足を止めて 振り返った。

普段ならば 見て見ぬフリをしなければならない立場。

顔見知りだということを、他の使用人達に知られるわけにはいかないのだから。

けれど 今は、そんな形振りを考える事も無い。

周りのシャルロッテと一緒に仕事をしていた侍女達は、ちょっと驚きを隠せていないのも無理も無いだろう。

自分達の憧れとも言つべき王妃付きの侍女に声を掛けられているの

だから。

「お仕事中に「めんなさい」ね？」

彼女に、少し お話したい事があるの。

悪いけれど 代わりにシャルロッテの仕事もこなしてくれるかしら？」

リーンは、営業スマイルとも言ひべき微笑を向けて 彼女達を遠ざける。

これをすれば 大概の者達は、思考が停止して 言つがままになつてくれるのだ。

そして、その言葉通り シャルロッテと一緒にいた子達は、

「ええ そうね？」

何か…… あつたの？」

旗から見れば、コルネオが言つたようでは 違和感があるようこ思えない。

けれど 何かがおかしく思える。

「イリア様からは、何も聞いていないけど？」

もしかして やつを…………出払っている間に、変更事項でもした？

その問いかけに リーンは、ニッコリと微笑んだ。

「いつもいつも、変更になつているから パニックしなるかもしけないけどね？」

だけど…………イリア様もそうだけど 私達も 彼方の事を信頼しているわ？

誰よりも 危険を承知で任務を随行しているんですもの

「お世辞はいいよ。

それで…………？

何が変更になつたの？」

どこか痺れを切らしている様子に リーンは、少し言葉を選ぶ事に。

「隣国が不穏な動きをしているといふ事は、彼方も聞いているでしょう？」

それに先立つて、陛下達が出陣する事になつたといふ事も、

「まあ…………知つてゐるね？」

戦える騎士や兵士達は、出払つてしまつんだから…………王宮内は、潜入してこるゝ影ゝやワーン達のような護衛が力を發揮するんだもん。

特に、今回は、陛下の真名をお守りしていける王妃様だけでなく、来賓のセレディー皇子もいるしね？」

「セレディー皇子は、トッドが命を賭けて守るまよ。

それが、主に忠誠を誓つた騎士の定めなんですもの」

真剣な表情を浮かべている侍女の様子に、少女のやうな顔立ちのく影ゝの一員は、ただ黙り込んでいるだけ。

「勿論、それは、騎士だけでなく、彼方や私達も同じね？」

「えりれた事をこなすんですもの。」

まあ……失敗してしまつ事もあるわ?

だって 人間なんだしね?」

シャルロッテは、目の前で語つてゐるリーンを見つめた。

心の中では、彼女の真意が読めない。

だが なぜだか……焦りを隠せない自分がここにいる。

見据えてきている瞳は、言い逃れを許してくれないだらつ。

これが 数年に渡り 王妃を守つてきた者の強みなのかもしけない。

元々は、自分と同じ刺客に成り下がつた者の血筋のはずなのに……

リーンは、自分に向けられている殺氣に 確信を持った。

やはり ネオの勘は正しかつたみたいね?

「彼方…………何者？」

本物のシャルロッテは、どこにいるの？」

その言葉を受けて シャルロッテは、クスクスと笑う。

リーンは、その反応に 眉根を寄せた。

「何がおかしいのかしら？」

彼方が偽者なのだとしたら 本物は、どこかにいるはずでしょう？

そんなに似ているといつ事は、血筋？

イリア様から 国内で老師が目撃されたといつ話を聞いていたわ？

シャルロッテは、その話を聞いて 自分から確かめに向かった。

そして 彼方は戻ってきたわね？」

「驚いた。

バレないとつっていたのに まさか…………こんな早い段階で知られてしまふだなんて。

老師の話していた通り、この國の王は、思つてはいたよりも頭がキレるみたいだ。

周りの國じゃ、この國が生き残つてゐるのは、運がいいだけって話しだけど……、実は、王やその周りの臣下達がよく動いているからつてことだね？

やつぱり、潰すには、周りからすべきなのかもしれない」

シャルロッテに成り済ましていた者の発言に、王妃付き侍女は、息を呑んだ。

その口調からは、焦りが全く見られない。

この状況は、自分にとつて不利だとも思つていないのである。

「忘れてはいるようだけど、潜入しているのは、一人じゃない。

じゃないと、あの「ローズ」とかいう侍女を襲えないからね？」

まあ……、本来の目的からは、ズレてしまつたけれど、計画に支障は無いの」

言葉に反論する前に、リーンの意識は、何かに引っ張られてしまつた。

それが何なのかを自覚した時には、時既におそく 意識を保つ事は出来ない。

背後に立っていた人物に気が付けなかつた自分に苦虫を噛むような表情を浮かべて そのままその場に崩れ込んだ。

／＼＼＼

「…………は？！」

リーンが家に戻つてこない？」

「ローズ」の眠る部屋の前で寝ずの番をしていた宰相は、息子が泣きながら抱きついてきた事で、驚きを隠せなかつた。

その後には、心配で堪らないという、シャーリーが立ち尽くしている。

「最後に見たのは、シャルロッテらしいの。

それで、少し話してから別れたそつなんだけど…………その後、誰にも姿を見られていなゐわ。

イリア様にも話を通してきたといふなんだけど 王宮内に気配を感じられないって」

普段は見られないほど困惑している侍女に 宰相は、歯を噛む。

それだけ 状況が悪いという事なのだから。

「陛下とミコアム様には、あまり心配を掛けたわけにも行かないから まだお話していないの。

でも 貴方には、まず先に知らせるべきだと思つて……」

「ええ 教えていただきて感謝しよう。

だが それでも…… 状況は変わらない。

それで リーンは、何かに巻き込まれたと判断すべきなのかもしれないな」

男は、眼鏡を拭きながら 呟いた。

この仕草は、焦っている証拠だ。

「ネオの話だと……シャルロッテがおかしいそななんだけど。

でも 私は、そんな違和感を感じなかつた。

もしそうだとしても……イリア様が気が付かないはずがないしね?

けど……リーンは、ネオの勘を信じて行動を起こしたのかもしない

「つまり その起こした行動で、相手側にとって何か不利な事隣連れ浚われた可能性があると?」

宰相の言葉に シャーリーは、小さく頷く。

その反応に 男は、綺麗な顔を歪める。

「あの馬鹿ッ！」

いつになつたら 学習能力が養われる?!

ミリアム様もミリアム様だが……リーンも大概 後先考えない行動ばかりじゃないかッ！」

「うーん……それは、庇いたて出来ないわね?」

見た目は、大人しいのに 私達の中じゃ……一番 考えたらすぐ行動に移す子だから

シャーリーは、従妹を庇つ言葉が見つからない。

それほどまで 今までの体験が脳裏に浮かび上がつてくるのだから。

「くローズ」を襲つた者の事もありますし 一人で行動しないようになすべきだと侍女頭にも進言したんですけど ちょっと、難しいかもしね。

王宮での仕事は、何かと予定通りに進まないものだから

「ああ そうだろうな？」

だが 注意はしておいて欲しい。

もしかしたら 陛下と王妃の周りにいる者が狙われている可能性もあるからな？」

その言葉を受けて シャーリーは、”御意”と 言つて そのまま従妹の息子を抱きかかえて 立ち去つた。



「王妃付きの侍女が、一人行方不明になつた？！」

セレディーは、その話しひを聞いて、驚きを隠せなかつた。

しかも、その人物が、宰相の奥方だというのだから、困惑を隠せない。

「リーンは、少し抜けている部分にこそあるかも知れないけど、とても身体能力が高いのに……。

今まで、何があつたと、一族の手に落ちた事などなかつたわ？

ましてや、ネオを妊娠していた頃でも

ナディアも、ショックを隠せないまま持つていた本を取り落としてしまつている。

トッドは、何も聞こえていないかのように、平然としている。

「詳しい事は、まだわかつていなければ、そのお陰で……、兄さん

は、凄い事になつてゐるわ？

王と王妃には、その事を伏せておくにしても、特にセレディー皇子の耳には入れておくべきだと思つて。

ナディア殿下……あのお2人には、『内密にお願い致します。

兄と話し合つた結果、リーンは、しばらくの間、外での守りに従事していると申し上げる事になつてるので、

宰相代理を務めていたコーネリアの言葉に、一同は、頷く。

「ところで、その宰相の奥方は、『ローズ』を襲つた刺客に捕らえられた可能性はあるのだな？」

皇子の問いかけに、コーネリアの表情が固くなつた。

「その可能性は、最も高いです。

今は、こちら側で、内通者がいる可能性を洗つており、その矢先の出来事なので……あまり話す事は不可能ですが

まるで突き放すような言い方だが、セレディーは、気に留めていない。

ただ 今も眠り続いている愛しい少女の姿が思い浮かぶのみ。

「だが リーンの事だ。

何か 手がかりの残しているのでは?

そうではなくては……王妃の楯にはなれやしない

トッドが口を開いた。

その発言に ナディアは、眉根を寄せている。

「アンタは、相変わらず無神経な発言をするだなんてッ!

皇子は、なぜ こんな男を傍に置いているのです?ー

怒りに満ちた様子で詰め寄られ セレディーは、息を呑んだ。

そんな様子を見つめて 宰相代理は、小さく溜息をついてしまつ。

「トッドは、亡き母上が認めた男です ナディア殿下。

確かに國の危機に「命したのは、誓められた行為ではない」と。<sup>14</sup>

けれど 何か理由があると思つ

皇子の発言に ナティアは、赤みの掛かった金髪を少し逆立てた。

「アーロンは、最期までこの男の子と信じていました。

なのに トッドは、戻つてこなかつた。

結果として……アーロンは、血の命を代償にして この地に眠つていた土地神を田覓めさせたわ?

トッド 貴方は、何も話さうとしないけれど 一体 アーロンとどんな密約を交わしたのかしたね?」

その発言に 銀髪の男は、何も答へよつとしない。

ただ 黙つて目の前にいる女を見ているだけなのだから。

「ナティア……今は、お願いだから トッドと喧嘩しないで。

昔なうともかく 今は、国交問題になりえるんだから

「一ネリアは、幼友達の立場で発言する。

その言葉を受けてナディアは、肩を竦めてしまう。

元々は、王位を持つていたにしても今は、それを返上してしまうている為、国王の第一騎士は、自分よりも身分が上になつていてるのだから。

しかも相手は、幼い頃から怒らせると頭の上がらない姉的存在。

「トツド……貴方もね？」

アンタの無駄口を叩かないっていう性格は、馬鹿げた噂に振り回されてる見習騎士達や衛兵達にも見習わせたいほどなのもよ？

だけど時が来れば……アーロンとの約束を聞かせて欲しい。

ユウリイも、アンタが恐れをなしてこの国を逃げ出しだなんて思つちゃいないんだから。

現にアーロンが命を代償にして直ぐ……援軍が来た。

あれは、ただの偶然ではない。

後でミリアムが、セレニニア様に聞いたそうだけど貴方が懇願したと聞いたわ？」

コーネリアの言葉を聞いて ナティアは、驚いたように 田を大きく見開く。

セレティイーは、その話を聞いていたらしく ビニが心配そうな顔になっていた。

「とにかく 皇子…………」の王宮内は、今までと違い 危険となつております。

故…………お一人で行動なさらないよつ。

姿を変えても 危険は変わりませんから」

念を押すように言われ 皇子は、肩を竦めてしまつ。

「ローズ」の提案してくれていた押し伸びは、いつの間にか 王宮内の殆どの人々に知れ渡つていた。

最初こそは、誰もが驚きを隠せなかつたが セレティイーの境遇を思い直し 姿を偽つていた時が本心であると思つようになつたらしい。

その為 誰も、自分達を騙していたなどと思つてもいなうつだ。

逆に 親近感が沸いたと 誰もが皇子に対して 以前のような感情を持たなくなっている。

もしかしたら それが、**「ローズ」**の狙いだったのかもしれない。

「それでは、先程のお話、ご理解ください。

では 失礼致します」

コーネリアは、一礼すると そのまま部屋を後にした。

その後姿を追つて ナディアは、再び 散らばつた本を拾い集めて いる銀髪の男に視線を向ける。

トッドは、いつもの騎士の服ではなく 動きやすい服装だ。

勿論 セレーティー皇子を守るための剣は、腰に常備してある。

「時が来れば……貴方は、アーロンを見殺しにした理由を公にするのね？

その日… 貴方の最期だと思ひなさい」

その言葉を受け トッドは、初めてナティアを見た。

視線を受けて 女は、少し怯んだ様子だつたが すぐに睨み返す。

2人のそんな様子を見つめて セレディーは、小さく溜息をつき  
散らばつてゐる他の飼料となる本を探し出した。

ふと 机の下にある本に手を伸ばす。

そこには、見知らぬ文字が本の背表紙にまで続いてゐるらしい。

「これは…… 禁書だな？」

それも 隨分と古いものだ。

なぜ このような本が、ここに……？」

セレディーは、不用意に文字の部分に触れないようにしながら 手  
に取る。



### 疑惑3

何か冷たいものが、顔に触れた気がして 女は目を覚ました。

急いで起き上がるつとすると 全身から激痛が走る。

呻き声を上げながら上半身だけでも起こすと 自分がどこか田の当たらない場所に横たわっていた事に気が付く。

そして 自分が覚醒するきっかけとなつたのは、天井から滴つてしまっている水だ。

神経を集中させ 間の中に目を利かせてみるが 見定める事が難しい。

おそらく 何らかの結界を張られているのだろう。

だとしたら 自分が、ここにいる事に 仲間が気が付く事も不可能に近い。

体の状態を確認してみるが 拘束はされていなかつた。

逃げられないと確信を持たれているのかもしれないが 状況は悪いだろう。

「とにかく ここがどこなのかでもわからないと」

痛みを堪えながら 立ち上がる。

少しばかり眩暈がしたが 気のせいだと思い込む事に。

そうする事で 少しは、動ける範囲が広がるのだから。

「やつぱり 一人で突っ走ったのが悪かったのかしら？」

絶対 戻つたら あの人ガ、怒るでしょうね？」

リーンは、乱れた髪の毛を直しながら 小さく溜息をつく。

衣服は、おそらくここに連れて来られた時に乱れたのだろう。

「あのシャルロッテに成り済ましている子の他に……王宮内には、

危険因子がいる。

おそれく、**「ローズ」**を襲つたのも、そいつの仕業だわ？

こんな事になるんだつたら、……ミイナくらいには、相談すべきだつたかしら？

だけど、時間も無かつたし……」

リーンは、今更、自分の後先考えず、行動に移す性格を恨めしい。

子供の頃は、誰もが微笑ましく見守つてくれていたり、少しばかり厳しく説教してくれる人もいた。

けれど、今の自分は、もう成人しており、大切な主を守る権力もあるのだ。

それなのに、その責務を怠り、このよつた無様な事態に陥つてしまつなど。

「ミコアム様には、心より謝らないと……。

だつて、の方は、私達の事を本当の家族のように思つてくれているといつのに、」

リーンは、暗い天井を見上げる。

見渡す限り この部屋には、出入り口はない。

天井は、暗いが 少しだけ隙間から光が漏れており 自分は、そこからここに落とされたのだろう。

全身に激痛が走っているのも その為だ。

おそらく 身体能力が高いことを熟知されており それを防ぐ為かもしれない。

確かに 痛みは忘れようと出来るかもしれないが されど、いくらなんでも出る事は不可能なのだから。

「どうしたものかしら」

リーンは、絶望にも似た声で呟いた。

{

{

{

{

「本当に、バレないと思っていたの？」

本氣で呆れるわ

イリアは、身重の妻の田の前に座つて 肩を竦めていた。

その隣には、心配そうな顔をしているコルネオと彼を抱きかかえて  
いるシャーリーだ。

ミイナは、夫の前に仁王立ちになつて 怒り顔。

「今は、妊娠している為に一線を引いているかも知れないけれど  
私も、同じ立場だわ？！」

それなのに 事もあるつにも…… 同じ任務に付く仲間が連れ去ら  
れたという話を夫の貴方ではなく 噂で知る事になるだなんて！…

「誰だよ、話したのッ！」

リーンの話は、陛下や王妃にも秘密なんだぞ？！」

イリアは、普段のおふざけな様子ではなく 少し焦つている。

「多分 それが、老師の作戦なんじゃない？」

ミリアム様の性格を考えた上での「

妻の発言に 男は、目を大きく見開く。

シャーリーも、ハツとしたように 息を呑んだ。

「つまり ミリアム様が、自分が狙われた為に 私達が危険になれば 自分から王宮を飛び出すと思われているって事？」

確かに 今は、その悪い癖が収まっているけど…………

シャーリーの言葉に ミイナは、難しい顔で頷いた。

「現に シャルロッテの時だって、似たような感じだった。

あの時は、標的がナディア殿下だつたけど。

作戦を考えているのは、あの老師だとしたら ありえない話じゃないわ？」

「ローズ」の襲撃だつて 元々は、ミリアム様本人を狙つていたとしても 精神攻撃に切り替えただけだとしたら？」

「確かに 王妃は、相当 気に病んでいる。

自分と「ローズ」が間違えられたんじゃない까って。

だとしたら とんでもないじゃ ないか……」

イリアは、唾を飲み込んで 顔を蒼ざめた。

「陛下とミコアム様にリーンの事を話さないのは、今よりも厄介な展開になるだけね？」

あまり ショックを『えなこ』…… 真実を話すべきなんじゃない?

セントレイー皇子とアンドレは、リーンの事を話してあるとじゅうへ。

だったら お話をべきだと思つた

「だけど 今のミコアム様に話せば とんでもない事になるかもしないわ?」

シャーリーは、哀しげな表情を浮かべる。

「今 話さなければ…… もっと安静にしなければならぬ時に、

後先考えずに飛び出すんじゃない？

今は、まだ 支えよつと思えば 陛下が付いている。

けれど 隣国での戦争が更に悪化すれば……陛下は、軍を引き連れて 仲裁に入らなければならぬ。

もしも その時を狙つて…… //リリアム様の耳に今回の一件が入れば?「

それを聞いて 滅多に顔色を変えないリリアが、立ち上がって 今にも倒れそうな顔色になった。

シャーリーに至つては、小刻みに震えだして 膝に抱いているコルネオが、今にも落ちそうだ。

「ちょっと、待つてくれよ?!

まるで 王妃の懷妊を知つていたかのよつた展開ぶりじゃないかッ!

ナディア殿下が、その兆候を発表したのつて つい最近の事だぞ?

だけど 今回の老師の計画は、どう考えたって 前々から決まって いるような段取り……もしくは……「逐一 その情報を 流している内通者がいる」

イコアの発言を遮るよつて ミーナが断言する。

「あんまり その可能性を考えたくないけど…… それしか考えられないわ？」

「ローズ」の一件から、王宮内の者を洗い直していくそのだけど古くから務めている者の近況も調べるべきなんじゃない？」

隣国にも、この国内の者に対する事が知れ渡っている。

もしかしたら それを逆手に取られているのかもしれない」

「…… もう少しや 王妃に今のうち話せばいいのかもしれないが。

しかも 内通者の一件もあるし…… 慎重に進まないと」

頭を抱えている夫の尻目に ミーナは、未だに凍り付いている同僚に目を向けた。

「………… という事だから ミコアム様の心のケアをお願い。

リーンが連れ去られたっていう事からして 貴女が老師と繋がっている可能性はない。

仲間が裏切っているだなんて あんまり考えたくない事だけど…… 私達は、何の為に存在しているのかをよく思い出しなさい？」

旗から見れば 残酷な立場にいるかもしれないけど…………今の私達の幸せがあるのは、陛下とミリアム様の恩恵があるからこそ

「わかつてゐるわよ、ミイナ。

「非情にならなければならぬって事ぐらい…………承知している。

今この二つの話 宰相には、通しておくれよね？」

「そうね…………もしも 宰相が裏切り者なのなら…………愛する妻を浚わしたりしない。

「もっと 人害と称すべきやり方で ターゲットを地獄の底に突き落とすやり方をするはずだわ？」

2人の会話を聞いて イリアは、小さく溜息をついてしまつ。

「いらっしゃんでも…………宰相をやう言ひますか？

「あの人だつて、人の子だつていつのに…………」

コルネオは、大人の会話を意味も無く 首を傾げて見つめている。



王宮内は、衝撃を受けた。

王妃のお気に入りだつたくローズが襲われた事件に続き 王妃付きの侍女の1人が、何者かに連れ去られたという話が公になつたのだ。

最初こそは、ミリアムもショックのあまり寝込んでしまつていたが 現在は、少しずつ回復してきているらしい。

けれど 人々の不安は、留まる事を知らないだらう。

特に 下働きの者達の中で 自分も狙われるのではないかと恐怖心に駆られてしまつた者が出てきて 持ち場を放棄してしまついるのだから。

その中で一番 波風がキツイのは、やはり使用人達をまとめているルチアだった。

「本当に厄介な事になつてしましましたね？」

まさか、「ローズ」さんだけではなく、「ローンさんまでも。

次は、シャーリーさんか……休業中のマイナさん辺りが狙われそうですね？

王妃様も、やつと御懷妊なわったのに、問題が出てきて、大変だ

「アナ斯塔シア……貴女、最近、シャルロットの口の悪さが出てきたようですね？」

あの子の場合は、そこまで酷く言こませんが」

ルチアの言葉に、赤毛を縦ロールにしている少女は、頬を膨らませた。

「だつて、本当の事じゃないですか。

それに、いつやつて口に出していくこと……不安になつてくるんですね。

普段は、ローンさんが緊張している空氣をこつも和やかにしてくれるの！」

哀しげな顔をしているアナ斯塔シアに、ルチアも、小さく溜息をつく。

「それは、どこの持ち場でも似たような感じですね？」

特に シャーリーの落胆振りは、相当なものですから……。

慣れていない子達は、その変わり様に戸惑いを露せていませんし。ミイナがいてくれれば 少しは、マシになっていたかもしませんけど……さすがに 妊婦を危険な場所に引き入れるわけにも行きませんからね？」

王妃様の精神を追い詰める要素が増えるだけになってしまつ」

「つたぐ……誰が、糸を引いているんでしょうね？」

「こんな卑劣な事を計画するだなんてッ！」

見つけて、とつちめてやらないと 気がすまないですよ……」

アナ斯塔シアの発言に ルチアは、眉間に皺を寄せた。

「無謀な事には、首を突つ込まないよ！」

それでも、ここ最近は、人の出入りが激しい。

しかも そんな中での事件です。

顔見知りでも、油断をすべきではないでしょ？

その言葉に、侍女は、目を大きく見開く。

「まさか……新参者ではなく、古株の中に……刺客がいるかも  
しれないってことですか？」

確かに、その可能性は、ないわけじゃないんですけど……。

嫌ですよ……仕事仲間を疑わないといけないだなんて……！

確かに、様子がおかしい子が、いますけど……」

赤毛の侍女の発言に、侍女頭は、真面目な顔になつた。

「誰です……それはッ！」

「事と次第によつては、報告しなければ……」

「↙ローズ↘さんと同時期くらいに王宮入りした下級貴族の子です  
よ。」

ほり……本来なら、王宮まで来れない筈なんですが、先王の弟  
君による推薦もありましたし、容姿と教養に恵まれて、見習いに  
なつた……」

「ああ オリヴィアですね？」

彼女の身元は、しっかりしているはずですよ？」

礼儀正しいですし、マナーもしっかりしていますから ミリアム様や陛下の評価も高い子です。

ただ いつも傍いでばかりいるのが……玉に瑕なのですが……。

彼女のどこが、おかしいのでしょうか？」

「彼女……何だか 何かに怯えているみたいなんですよ？」

定期的に 外部からの手紙を受け取っているみたいなんですけど……日に日に、元気がなくなってきているみたいなんですよ。

元々、食が細かったんですけど 今回の事が明るみになつてから……更にやつれてきて」

それを聞いて ルチアは、神妙な表情になる。

「確かに 彼女が、王宮に上がつて直ぐの頃……ミイナの代わりに入つた毒見役が、一人 体調不良を訴えていましたね？」

ナディア殿下の診察の結果 その者は、命に別状もなく 今も仕

事を続けておりますし。

まあ その食事は、万が一のことを考え 膽に運ばれる事はあります  
せんでしたが、「

「彼女が、食事の中に薬を紛れ込ませた可能性があるって事ですか  
？」

田を大きく見開いているアナ斯塔シアの質問に 年老いた侍女は、  
頷く事も戸惑つてしまつ。

「そうであつては欲しくありませんが 可能性はあります。

一応 彼女に話聞く必要がありますね？」

けれど オリヴィアに話を聞く事は叶わなかつた。

彼女は、その日 遺体となつて発見されたのだから。

「 いろんな場所に呼び出して 何のつもりだ？」

姿を現したらどうだッ！」

イリアは、陰しきを隠せずに 声を張り上げた。

けれど 周りを見回してみる限り 何の気配もない。

男は、苦虫を噛み締める氣持ちで 舌打ちする。

その手には、特殊な細工を施されえている手紙が握り潰されていた。

何とかして 手紙を送りつけてきた者を探りつつしたのに 何の記憶を読み取る事も出来なかつたのだ。

手紙に気が付いたのは、通例の訓練を終え ヴローズを見舞い、自宅の寝室に足を踏み入れた時。

妊娠中の為に 妻は、深く寝入つて いた為 その存在にも気が付い

ていなはず。

「こんな断言しているんだから、確固たる証拠があるとこ「ことなんだろ」「へーー！」

「話があるのならば 田の前に姿を晒すんだッ！」

その声に反応したのか 微かだが 息を呑む音が……。

どうやら ここの場にいるのは、自分を含めて 1人だけではないらしい。

「随分と強気だな？」

あまりに色々な事が起き過ぎて 感情的になっているだけだと想つていたが

男の声が聞こえてきた。

「つまり それだけの実践を交えてきたってことでしょう？」

あんまり、調子に乗つていると グサリとやられちやうかもしけないわよ？」

今度は、女の声もだ。

振り返つてみると 黒いフードで顔を隠した男と女が、物陰から出てくる。

イリアは、その姿を確認して 訝しげな顔になった。

男の方は、体格がよく フードの中には、いくつかの武器を隠しているのだろう。

女の方も、スラリしており 小柄だが 物腰からして、相当な手練だと見受けられた。

「なぜ 僕に伝言を寄越した?」

それが、一番の疑問だ。

確かに王を守る第一騎士という称号を貰えられている。

けれど 城の中には、未だに自分を疑っている者も少なくないのだから。

「話を冷静に聞いて 感情に流される事なく 正しく判断できるだらうところ」からの一一致した考え方だ。

普段は、ふざけている部分もあるかもしないが 担つてこる点でも 有利になるだらうと判断した

無機質に言つ放つ言葉に イリアは、息を呑む。

「どこか緊張してこる自分に 咙打ちしてしまつ。

田の端にこる男は、必ず驚いたつて自分よりも年下なはずなのが、どうして ここまで緊張してしまつのだらうか？

「アリまで 気を張らなくとも大丈夫ですよ？

我々は、彼方方の敵ではありますから。

懷に隠している短剣をお納めくださいませんか？

女の発言に イリアは、マントの下に隠していた短剣を取り出す。

万が一の場合、捨て身で相手に一撃を「」えるつもりだったのだ。

「ならば、説明してもらいたいものだ。

「の手紙には、『ローズ』の一件と王妃を狙つ一派の情報を提供するあつたな？」

「事と次第によつては、拘束しなければならぬ」

第一騎士の威厳ありな言葉に、男女2人は、苦笑気味な様子。

「おこおこ……！」まで、頑固だったつけ？

「氣前のいい兄ちゃんだった氣がしたのに……」

男は、どこか情けなれりに、小さく溜息をつく。

「仕方がないんじゃない？

私達の今の姿を考えたらね？」

立場が逆なら、アンタの場合は……何の躊躇もなく、切り倒していくと思つんだけど？」

女も 苦笑しながら イリアに聞こえないよう 呟いた。

そんな2人の様子に 騎士は、訝しげな色を隠さない。

「信じてもううには、二つちの手の内を見せる必要があるのかもしれないぞ?」

第三者の声が聞こえて イリアは、ハツとしたように 振り返る。

すると ゼロには、先に姿を現した男女に加え 同じくフードで顔を隠した者達が姿を現した。

先に発言した男の声は、どこか威厳が伴つ。

「 イツヤ…………驚いたな?

お前らは、影で出でこないのかと思つていたが。

他の奴等は、まだ 待機中なんだね?」

「 事情が変わったのよ。

彼に協力を仰ぐには、明らかにしなければならないでしょ。」

威厳の声の持ち主である男の隣から、背の高い女性が出てきた。

その言葉を受けて、自分に対し挑戦的だった男も冷静に諭していった女も、まるで側仕えのように下がっていく。

「今から話す内容は、他の方々に『内密にして頂きたい。

まだ 時が来たわけではないので……」

「納得のいくことならね？」

アンタが、この無作法な連中の親玉のようだけど、まるで、ビーバーの王族のような待遇だねえー？

初めて会った時のユウリイを思い出す。

今でも、似たような感じで、少しほ、王らしい行動をするようになっているけど。

それに、気のせいいか？

昔の知り合い友ダブるんだけどなあー？」

「ヤリと笑いながら話すイリアに、田の前に立つ男は、ゆっくりとフードを外した。

その瞬間、騎士の顔色が、一気に驚愕の色に変わる。

田の前に見えていた光景に、驚きを隠せないらしい。

「え……まさか 血筋つてわけ？！」

「おいおい ありえないじやないかッ！」

「全くありえない話じやないわ？」

私達が、この場にいる事がその証拠。

まだ 存在していない場合もあるけど 他の仲間も、違う場所で潜んでいるわ？」

気が付けば 全員が、フードを取り除いていた。

イリアは、もう疑つ余地がないと判断して 大きく溜息をつく。

「……今までされたんじや 疑えばただの馬鹿じやないか。

それで……？

何を話してくれるんだ？」

その問いかけに フードを外した男は、”警告です”と 低い声を発した。

「周りの人々に注意を払ってください。

特に 信頼している部下の方々に……。

彼らは、確かに貴方方を裏切るつもりなどないでしょうが 連中は狡猾です。

利用できるのならば なんでも使ってみせる。

それが、どんなに卑劣で残酷な結果になつてもです

「言われるまでもなく 警戒している。

「ローズ」の一件もあるからね？」

どこか苛立つている男に 一行は、顔を見合わせてしまつ。

「口に出すのは、簡単だ。

だが、本当に疑っているわけじゃないだろ？

頭ではわかっているかもしねないが、心の中では信じたいと思つて  
いる。

特に、アンタの場合は、自分の部下を本当に信じているから、疑  
たくないんだ」

イリアは、それを聞いて、眉根を寄せる。

「シャルロッテという侍女に気を付けて。

彼女は、何かを企んでいる。

宰相閣下の奥方が、行方知れずになつたのも、関わっているのかも  
しない」

「皇子……先ほど 陛下から使者が送られてまいりました」

その言葉を受けて セレーティーは、息を呑んだ。

言葉を発したトッドは、仏頂面で平然としていた。

「父上からは、何か問題でも？」

お前は、表情が読みづらいから 何が言いたいのか真意がわからな  
いが」

実のところ 聞かなくとも 何を言われてきているのかは、  
わかっている。

王宮で起きた一件については、既に全國に伝わっているはずなの  
だから。

皇子の質問に 銀髪の男は、書状らしきものを本が山積みになつて  
いる机の上に置いた。

セレティーは、無言でそれを手に取り、読み始める。

そして、小さく溜息をついた。

「父上達が心配するのもわからなくもないが、僕は帰るつもりなどない。」

トビアード……使者にそつと教えてくれ。

ビツカ……使いツ走りの騎士見習いの誰がなんだろ？

今頃、水を飲みつくしていることだろ？

途中にある砂漠は、相当、体力を奪うからな？

少しばかり休憩させてやれ

「承りました、さう伝えておきましょ。」

あの様子からして、少し強く言えば、引き下がるでしょうから

主の命令口調に、騎士は、軽く頭を下げる。

「すまないな、お前に言つづらことを言わせてしまつて……。」

それでも、お前は、他の騎士達に恐れられて、この「元の」

ビリーが悲しげな顔をして、セレティヤーに、男は、小さく苦笑。

「私はそう思っていませんよ。

陛下や王妃も、貴方の気持を尊重させて、ほしやうなので。

それに、そのように言って遣わされていなくとも、私は皇子の心を優先させて頂きますよ。」

少年は、それを聞いて、照れ笑い。

けれど、フッとビリーが遠くに視線を注ぐ。

「ただ、長くは留まれないだろう。

でも、ハローズくが目覚めた時、一緒にいたい。

どんな返事をされても、ずっとこのままのは、嫌なんだ。

僕は、彼女と出逢った事で、自分を見直すことが出来たと思つ。

だから、たとえどんな結果になつても、結末を見届けたい。」

「ねえ……セレーティーおうじは、ハローズ<sup>ハ</sup>がおきたら かえつてしまつのですか？」

まえのおうじは、にがてでしたけど いまのおうじは、ボクきらいじゃないのに」

どこか寂しげさを持つ幼い子供の声に 2人は、ハッとしたり入り口に視線を向けた。

そこには、大きなくまのぬいぐるみを背負つて立るゴルネオの姿が。

「どうして……お前が王宮<sup>王宮</sup>に?...」

セレーティーは、驚きを隠せず 声を張り上げてしまつ。

父は仕事に忙しく その上に母親が行方知れずになつてしまつ  
現在は、ミイナの家に預けられていたはずだ。

「まさか 1人でここまで来たのか?！」

「護衛もつけずに?」

年上に少年の怒声に似た声色に コルネオは、背負っていたくまを  
思い切り抱きしめる。

「1人じゃないです。

きれいなおねえさんが、てをつけないでいっしょにきてくれたんです  
から。

ほり……あそこには……あれ？」

少年が振り返った先には、誰もいなかつた。

トッドは、険しい表情を浮かべて 廊下に駆け出していくが 一人  
影などない。

「ネオ……どんな女性だつたんだ？」

「顔を見たんだらうつ？」

肩を掴んで聞いてくる皇子に 宰相の息子は、目をパチクリ。

「とつてもきれいなおねえさんでしたッ！」

トッドとおなじ かみのいろがシルバーでした。

みのこなしが、とこもあつがで ひんもあつて。  
なまえは イブとなつてました

＼＼＼＼＼

「ちよつと イブ？！」

貴女、ビルに行つていたのよツー

先ほじかで話を聞いていたらじこイリアは、その顔を確認して さ  
らに溜息をついてしまつてゐるじこ。

それは無理もないだねつ。

先に聞いた話と照らし合わせれば 嫌でもわかつてしまつたのだから。

「可愛らじこ頃の坊やが、迷子になつてしまつていてえ……送り

届けていたの。お。

あの頃が、最絶頂だつたんですね？

皆様方が、あんなに昔の姿を懐かしむのも無理ありませんよお

シリジミと語るイブと呼ばれた女の言葉を聞いて イリアが何とも言えない様子でいる事と顔を隠した男が口元をヒクヒクとさせていたが 他は、吹き出してしまつていた。

「イブ……それは、ある意味 禁句だつてッ！」

ケラケラと笑い声が響く中 叫び声が、木靈する。

「別人格って どんな姿形をしているのかしり?」

今のわたしのよひこ…………「ローズ」ではない姿つてことなのよね?」

「何だか 頭がこんがらがつてきそつな気がするわ」

「ローズ」は、自分の着ている服の裾に触れて 小さく溜息をついた。

触つてみる限り 上質の絹が使われている。

ミリアムが身に纏っている物よりも、上等かもしない。

そのことを考えると 何だか恐れ多くなつてしまつ。

結い上げられた髪の毛も、何だか自分のものではないような気がした。

この状態で 王宮のみんなに会つても 誰だかわかつてもらえないだろ?」

自分の今の姿を見たわけではないが 何だか落ち着かない。

「へ声へは、記憶を失う前のわたしを知っているようだつたわ？」

それに 協力者もいるつことなのよね？

信用できるのかは、別にして……今は、わたしに出来る事をしないとッ！

うん…………そりやー！

わたしが、別人格をこの中で追い出さないと ずっとこのままなんだものッ！

ずっと眠つたままなんて、絶対に嫌だし そんなことになつてしまえば ミリアム様達が悲しむものね？

きっと 現実の世界では、みんなが暗躍しているんだから…………少しでも役に立たないとッ！

「ローズ」は、真剣な表情を浮かべて 再び 先の見えない道を見つめた。

すると 何か影のようなものが、視線の先を横行していく。

一瞬だつた為、何かわからなかつたものの　この空間で目が覚め  
て、初めて見た自分以外の存在だ。

「待つてッ！」

「ローズ」は、迷うことなく　その後を追いかけていった。

「…………」

「………… 様？」

ミコアム様…………お目覚めですか？

体調が戻られていないのでしたら 今日の公務を休むよいつにと壁下  
が心配しておられましたが

ミコアムは、聞き慣れた声に反応して ゆっくりと意識を浮上させ  
た。

「…………夢の中で「ローズ」を見た気がしたわ？」

何だか どじかの王族のような衣装を着て どじかを歩いていたの

まだ寝ぼけているような発言で、シャーリーは、眉根を細める。

「前から不思議だとは、思っていたけれど、あの子…………どこかの国の姫君なのかもしない。」

記憶は失つてしまっていても、身に纏う高貴な雰囲気は、消えるはずが無いもの。

あの子は、わたくしにないものを持っているのだから

「何を言つているの？」

ミコアムにも、素晴らしいものがあるじゃないッ！」

あまりにも弱氣な発言で、シャーリーの声が荒々しく響き渡る。

「そんな弱氣にならないで頂戴？」

私達が、駒になつたのだって、貴女の人徳ゆえなんだから。

…………失礼しました、ミコアム様。

夢見が悪かったようですし、今日は、お休み下せませ

シャーリーは、一息つくと そのまま寝室を後にした。

一人取り残されたミリアムは、唇を噛み締め そつと小さく膨らんできていくるお腹を撫でる。

「お願いよ…………お願いだから、これ以上 わたくしの大切なもの  
を奪わないで？」

「……………」

「どうか みんなが、無事で過ごし 未来を迎えられますように…………」

悲痛な声を発する王妃の声だけが、部屋の中から嗚咽と共に聞こえてきた。

部屋を出たシャーリーは、それを耳にして 小さく溜息をつき、歩

き出す。

ある一階層へ関係ですか

1人の女性が涙目になつて 一室で膝を抱えていた。

「もう 知らないわ?!」

どうして…… あの方は、わたくしのことを見て下さらないのかし  
ら。

あんな切実に名を呼ぶくらいに想い馳せる方がおられるのならば  
どうして 正室に据えたところの?」

自分の口から出てきた言葉に 女は、涙の止め方がわからない。

止め処なく溢れてくる滴に 頬はどんどん濡れてく。

「最初は、何度も希望を持つた……。

けれど あの方のお心には、想つ方がおられる。

どんな方なのかとみんなに聞いても 誰も教えてくれない。

ただ…… H位を継ぐ可能性をお捨てになる勇氣をもつて下さつた  
ところ」と云ふ

膝から顔を上げると、艶やかなウェーブの掛かった黒髪が、垂れてくる。

結い上げていたはずだが、ずっと俯いていた為に落ちてしまつたらしい。

「姫<sup>メアリー</sup>……闇下には、色々と事情があるのだと思いますわ？」

確かに 性格に問題があるかもしませんが

ずっと空氣のよつに徹していたお付の女の1人が、重い口を開いた。

他の女官達は、何たる事をするのかといつよつに その発言者を驚愕の目で見つめている。

けれど 今この状況でこういった言葉が許されるのは、幼馴染として幼い頃から共に育つたからかもしれない。

「最初は、弟君の元に嫁ぐと思い込んで 初恋だったあの方への思いを封印するつもりだったわ？」

でも すぐあの方の妻になれると思つて 胸が躍つたとこうの

に……。

素氣ないのも、若輩者じやくしゃと未だに見下してくる貴族の方々と渡り合つているのだから……と 何度も仕方がないと諦めた……。

の方は、陛下に既に寵愛を一身に受けられた王妃様がおられるから 仕方なくわたくしを正室に迎えたに過ぎないのよ。

ずっと 独り身でいたから、隠れ蓑かくみのに丁度いいと思われたんでしょう?

お父様とお母様に恩義としても 親交を深める事で他の貴族達も文句が言えなかつたらしいし……名ばかりの妻でしかないのよ

やつと10代を終えたばかりの時しか過くしていない為か どこか拗ねたような儂わたくしい表情を浮かべた。

そんな若い主人の様子に 幼馴染の女以外の女官達は、息を呑んだ。

彼女が嫁いでからどのような環境で過ごしたのかわからない為 どこか戸惑つてしまつ。

そんな皆の様子に 何か知つている女官は、小さく溜息をつく。

「差し出だがましいかもせんが 閣下は、姫メアリーの事を愛しておら

れます。

小さな姫君のことも、本筋に可憐がられておられるではありませんか。

確かに お尊では、様々な推測が飛び交つておりますが、今の貴女の地位を搖るがす存在は、姿を現そうとしない幻影でしかありません

ん

幼馴染の発言に メアリーは、唇を噛む。

それは、幼い頃からの納得がいかない時にする彼女の癖。

「<sup>メアリー</sup>姫は、もう少し 周りの田も気にすべきです。

閣下には、閣下の立場があり 色々と苦労されているとの話なのですから。

こつ何度も 祖国に舞い戻る事が続けば 同盟を結んでいる他国に、変な噂を広めてしまつだけになってしまつのですよ?」

その言葉に 他の者達は、オロオロとするばかり。

「<sup>ジャンヌ</sup>貴女には、わたくしの気持ちなどわからないわ?」

幼さを残す姫君は、銀髪の幼馴染である女官を睨んだ。

「簡単に愛する方を手に入れて 幸せをも手にしているんですもの。わたくしには、それが不可能な…………だって の方には、大切な方がおられるんだから」

「あら…………私は、それなりに努力したんですよ？」

彼は、無口で 御自分の心を他人に悟らせないようにする事を昔から得意としていたそうですから。

それと反対に 閣下は、わかりやすいじやありませんか…………。

姫メアリーと喧嘩した翌日なんか 鬼のような訓練が待つて いるそつなんですかねえ？」

「それは、陛下からお話を窺つたことがあるわ？」

だから あまり他の方々に迷惑にならないように控えている方なのよ？

だって 貴女の片割れさんにも、泣きつかれてしまったんだもの

「ああ…………あのヘタれの言葉は、別に聞かなくても大丈夫ですよ。

どうせ 女の子の後ばかり追いかけばかりいるから、体力がついていないだけなんだもの。

お父様だって あの成長振りに頭を抱えてしまつているらしいしねえ？」

口元をくつと上げる仕草に 何人かの女官が、色めき立つ。

「ジャックの場合は、まだ精神的に子供だから仕方がないわ？」

だって 初恋をしたことがないそつなんなもの。

でも あの方は、違うと思うの。

あの姿だし わたくしと結婚する数年前までは、王位継承者として 社交などにすることを学んでいたこともあって、様々な貴族の「婦人方とも関係を持っていたはず。

きっと その中のどなたかに、報われない想いを抱かれているのよ。

じゃなかつたら あんなに想いを込めて名前を呼べるはずがないわ？

女は、幼馴染の発言に膨れつ面になりながら 田を細めた。

そんな同年齢の主人の様子に 女官は、微笑ましそうに口元を緩め

る。

「以前 夜会に出席なさった時 プレイボーイと有名な貴族の男性が言い寄つてこられた時、庇つて下さったのでしょうか？」

姫つ<sup>メアリ</sup>てば 顔を真つ赤になさつて、話して下さつたじゃありませんか。

仕方なく奥方に迎えた相手を、そのままにして庇うでしょうか？

我なら そういう感情を持つていないのでしたら、勝手にしろと言わんばかりに知らん振りするわ？」

その質問に 女主人は、返す言葉が見つからない。

ふと その時、扉のノック音が聞こえた。

「やあ 可愛い妹が出戻つてきていると聞いて、顔を出しここに来たよ？」

随分と声を張り上げているようだつたけど また ジャンヌに言い負かされていたの？」

優しげな微笑が扉の向こうから広がるのが見えて 女は、嬉しそうに相手に抱きつくる。

「エルディーお兄様、お久しぶりですわ！？」

興奮気味な兄妹の様子に幼馴染の女官は、呆れたように咳払いをしよつとしたものの、先を越されてしまう。

「限られた時間です。

公務の方は、まだ終わっていないのですからね？」

「どこが固い口調に、赤みの掛かった金髪の青年は、肩を竦めた。

「少しくらいはいいじゃないか」

「貴方が、姫様<sup>メアリー</sup>に逢わないと、資料の内容が頭に入れないと駄々を捏ねるから許したのでしょうか？」

「そうでなければ、あの馬鹿<sup>ジャック</sup>に対応を押し付けてまで、執務室を出る必要もなかつたということになりますが？」

「宰相代理……何だか、父親に似てきたんじゃない？」

君の母上達が、嘆かれていたよ？

昔は、あんなに愛ひしかつたのに……つて

その発言を聞いて、厳つい顔をしている背の高いプラチナブロンドの若い男は、眉根を寄せた。

「あまり関係のない」とでは?

姫様も、あまり部屋に籠られずに 散策などなされるとよいしきのでは?

今日は、天氣が良いですし 中庭の花園は、美しく咲き乱れていますよ?

王妃様自慢の花園は、1年中様々な花が咲いているのを覚えておられますか?」

「子供の頃からの遊び場でしたもんねえ?」

採取閣下代理は、随分とお父上に似てしまわれたようですが、お

ジャンヌがわざと語尾を延ばすと 閣下代理は、険しい顔をして先に部屋を後にしてしまった。

「相変わらずね?」

お兄様も、苦労なさつているのではなくて？

いつも宰相閣下代理と同じ執務室に籠らでていてるのでしょうか？

心配そつに聞く妹に エルディーは、苦笑する。

「あいつは、真面目すぎるだけさ。

根本的には、少し天邪鬼で不器用なだけ。

限界が近くなれば イヴが見計つたかのいづにお茶を運んできてくれるから大丈夫さ。

まあ……逆にジャックの機嫌が悪くなつてしまつんだけどね？」

エルディーは、優しい微笑を妹に向けてから 他の女官達にも軽く挨拶し、そのまま部屋を後にした。

「まだ 足取りが掴めないのか?」

ユウリイは、神妙な表情を浮かべて 溜息混じりに言つた。

その言葉を受けて 丘下達は、申し訳なむじつな顔をしてくる。

「仕方がありません。

老師は、自分に行き着く証拠を残さない。

以前の一件でも それは、身を持つて知つているではありませんか?」

宰相代理を務めているローネリアは、真剣な顔で発言した。

「わかつてゐる? ..... そのことはね?

だけど 何だか不安なんだ。

ミリアムの今の状態があるからかもしれないけれど 嫌な予感がするんだよ

「まあ……わからなくもないわね？」

それに あの老師の事だから…… 今回も卑劣な手段を使つてくる。

手始めに「ローズ」ってわけね？」

神妙な表情を浮かべて呟く女騎士に 王は、唇を噛んだ。

「リアは、リーンの失踪も 老師が関わっていると思うか？」

その質問を受けて コーネリアは、”ええ”と 頷く。

「彼女は、前の時でも真っ先に老師の手段に気が付いていたわ？」

後先考えずに突っ走るのは、問題だけど 何気に足跡を残す。

今日は、ネオが話を聞いてくれていて 助かったわ？」

「シャルロッテの一件か。

確か あの偽者塔の上に閉じ込めていたんだったな？」

「そうよ……そこは、周りが断崖絶壁になつているし 色々な

罠が仕掛けられているから リーン達のように訓練されていなければ、どんなに打たれ強い軍人だって 生きて帰れない。

危険な賭けに出るよりは、安全な建物の中で結果を待つ方が利巧だわ。

どんなに老師に忠誠を誓っているにしても それまで忠義を貫く恩義は、あるはずがないもの。

ロッテの話を聞く限り あの男は、言葉巧みに幼い子供達を傭兵の様に鍛え上げている。

中には、その最中に死に逝く子達も少なくなかつたそつなんだもの

「おやぢく」の國の古くからの慣わしの王妃直属の乙女ヒメを参考にしているんだろうね？

あれは、本人の覚悟も必要だといつに 老師のしている事は、一方的に過ぎない

コウリイが、小さく溜息をつくと 入口の扉が開かれた。

中に入ってきたのは、神妙な表情を浮かべたイリアだ。

「ビリ行つていたのよ、イリアッ！

貴方がいない間に、偽者の貴方の部下を捕らえたのよ?」

「一ネリアは、不安をぶちまけるように、声を張り上げる。

「ああ……済まなかつたな?

思つたよりも、話を聞いていたら時間が経つていたみたいでさ?」

いや……衝撃が強すぎて、我に返るのが遅すぎたのかもしれない  
んだけど。

何ていうか、やっぱり、血筋なんだと思つんだナビセア?」

意味のわからない発言に、王と第一騎士は、顔を見合わせてしまつた。

「イリア、……今まで誰と話していた?

わかるよつて誰と何を話したのか教えてくれ

「どこの命令口調な主の言葉に、イリアは、背筋を伸ばす。

「今から話すこと、口外しないでトセ。」

それによつては、彼他の協力が得られなくなつてしまこますから

珍しく真剣な顔をしている第一騎士に、コウリィとコーネリアは、顔を見合せた。

そして 2人は、頷く。

王と女騎士は、話を聞き終えて 言葉を失つたまま。

話し終えたイリア自身も、冷や汗混じりだ。

「 今の話は、本当なのか？」

やつと口を開いたコウリィは、真面目な顔をしている。

これが嘘ならば 極刑ものだろ？。

「 信じられないかもしませんけど 本当の事ですよ。

俺だって 嘘だと思っちゃつたんですから。

だけどあの子は、間違いなくあの人の子供です。

性格通り受け継いじゃうでいるから、悪いことなんですかね?」「

苦笑している男の横で  
コーネリアが、やつと我に返る。

「だったら……『ローズ』の正体は？！」

彼女も、彼らの知り合いつてことなんじや？」

「セリフですか、話しかけてませんでしたけど間違いないでしょうね？」

だとしたら あの不思議な感覚も、納得できるんですから」

イリアは、小さく息をついて 王座に座っている主に視線を向けた。

「彼らは、どこにいる？」「

会つて、詳しい話を聞きたいんだが……」

コウリイの言葉に 男は、  
”そういう出すと思つていましたよ”と

苦笑する。

「団体だと目立つそなんで 1人だけですけどね？」

ほら……そこ……・・・

その言葉を受けて視線を上げると フードを被つた背の高い青年が、  
その場に頭を垂れていた。

## 動き1（後書き）

少し先に王と第一騎士と第二騎士の3人が、△ローズの正体に行き着きました。

## 動き2

王宮内は、王の突然の行動に慌しく走り回っていた。

誰もが、あれは 正気を失つてしまつたのではないかと疑つてしまつたほど。

けれど 王を守る騎士や側近は、何か知つてゐるらしく 同じよう  
にいつも仕事に加え、動き回つている。

ただ違つのは、見知らぬ青年が 王の近くで話し込んでいることだ  
らう。

顔は、仮面のよつなもので隠しているので 何者なのか判断できな  
い。

けれど あれだけ優秀な王やその側近達が、信頼しているよつなの  
だから 只者ではないはず。

「成る程……その話から符合するのは、廢村になるわけか

ユウリイは、どこか思い口調で呟いた。

それを聞きながら 他の皆も、息を呑む。

導き出されたのは 誰もが、忘れる事の出来なかつた場所だ。

先の戦争で かけがえのない犠牲を払つてしまつた処なのだから。

今では、慰靈碑が建てられ 戦争において犠牲になつた人々の名前  
が刻まれたり 銅像が建てられているはず。

「あのこを根城にするだなんて 何て奴なのかしらッ！」

ナディアは、怒りを隠すことなく 声を張り上げた。

そんな妹の様子を 王は、心配そうに見つめている。

「落ち着くんだ、ナディア。

確かに 怒るのも無理ない。

だが 今は、捕らえられてると思われるローンとシャルロッテが  
心配しないと。

みんなに集まつてもらつたのだつて 色々と忙しくなるから、そのことを説明するためであつて「

王の間に集められたのは、王の側近に第一・第二騎士と王妃付きの侍女達にセレーディー王子とその護衛のトッドだ。

ルチアは、宰相が部屋を離れざる得ない状況の為 結界を敷かれた部屋の中にルチアが一緒に待機している。

「ちょっと、待つて？」

リーンは、心配なのはわかるかもしれないけど シャルロッテは大丈夫なんぢやない？

だつて あの子…… あんな姿ナリしているかもしれないけど 男でしょ？

余ほどの事がない限り 危険は回避できるんぢやない？」

シャーリーの発言に 数人が、固まつてしまつ。

他の数人は、苦笑してしまつてゐるらしい。

「LJの場で それをバラしかやつわけだ。

まあ……知らないままのも、氣の毒なのが1人だけいるかもし  
れなわけです

イリアは、空笑いした。

「どうしよう……私、普通にロッテの隣で制服着替えていたんで  
すけど~？」

間違いなく氣の毒な犠牲者の高いトーンの声が、響く。

その発言をしたのは、赤毛の縦ロールを揺らしているアナ斯塔シア  
だ。

彼女は、侍女長の姪であることから ルチアの代理として、この話  
に参加しているらしい。

「どうして 教えてくれなかつたんですか?!

私、相談事とか色々としちやつていたんですけどシー。」

「アン……黙つていたことは、悪かつたかもしれないけど 今は、

時と場所を考えなさいよ

大きなお腹を支えながら ミイナが、大きな声を上げた。

「あの子は、元々 ナティア殿下の命を狙つた老師によつて送り込まれてきた刺客だつた。

まあ……あまり気が乗つていなかつた事と老師の事を快く思つていなかつたこともあつたから 私達側についてくれたのよ。

あの容姿は、周りを欺くのに利用できる。

だから あえて……侍女として王宮入りする身分を『えられた。

成長過程において 色々と極限的な環境だつたため、成長も止まつてしまつてゐるそつなんだから」

「それに、アナスタシア。

ミイナも私もリーンだつて 元は、王族の命を狙つた暗殺者の血縁者だつてこと 忘れないで頂戴ね？」

ミイナに賛同するかのように 溜息混じりに話すシャーリーに アナスタシアは、肩を竦めてしまつ。

「それで……王血脉が、その老婦とやがて廃村に向かつのですか？」

「さつと黙り込んでいたセレティイーが、口を開いた。

「やうなるね？」

場所が場所だし、長い間、城を留守にする事になるだらう。

イリアとリアを含めた、数人の騎士も連れて行こうと思つてこる」

コウリイの言葉に、皆の顔が引き締まる。

王やその側近達の不在……それは、ある意味、残つてゐる者にとって最も緊張する日々になるのだから。

「廃村……か。

あそこには、うちの両親も眠つてゐるはずなんですよね~?」

アナ斯塔シアが、小さく呟いた。

それを聞いて、隣に立つていたナディアが、ハツとしたように、息

を呑んだ。

「確かに……アンの父親は、アーロンの同僚の騎士だったわね？」

それで 神殿によつて召喚された姫神子のジュリ様が母親……

「うん……結局、亡骸も回収されなくて お墓だけが慰靈碑の村の中央部の端にあると聞いたんですよ~」

聞いてはいけないことを聞いてしまった気がしたのか セレディーは、ソワソワしてしまっている。

けれど 王を含めた皆は、ただ黙つているだけだ。

赤子の頃から ルチアが背負つて仕事をしている姿を見ていたためか、古くから城にいる者にとって アナ斯塔シアの性格は、わかりやすいものなのだから。

それを肯定するかのように 赤毛の侍女は、先ほどの憂いなど直ぐに消え去つていた。

「確かに その近くには、崖があつて 高い塔がありましたっけ？」

もしかして そこに本物のシャルロッテさんとリーンさん捕らわれていると考えていいんですか～？

あそこは、足場がない上に 落ちたら海の藻屑もくすになる」と間違いな  
しだすから、リーンさんも大人しく捕まつてあげているのか  
もしませんね？」

アナスタシアの発言に 王も、同じ意見を持っているらしい。

「ところで 王がいない間……どうするんです？」

「影ヒメは、色々と動いてくれるでしょうけど 壁カミとは言えない。

私だけでは、色々と制限されてしまつます」

シャーリーは、真剣な表情を浮かべて 発言する。

その言葉に ミーナが、申し訳なさやつた表情を浮かべていた。

リーンは、泣きてしまつており ミーナは、現在 身重な状態。

「我々が、残りますから ご心配要りません」

凛としたその声に、皆は、驚いたように、視線を向ける。

その視線の先には、ずっと気配を消していたフードで顔を隠した集団が……。

「聞きそびれていたんだけど、彼等、何者なの？」

お兄様は、随分と信頼しているみたいなんだけど

ナディアは、神妙な表情を浮かべ、視線だけは外していない。

「〈ローズ〉の大切な友人。

今は、その説明だけで十分だと思つ。

信用するかについては、各自の判断に任せることつもりだよ

ユウリイは、それだけ言い終えると、皆の顔の見返す。

「疑わしいことは、我々でも承知の上です。

けれど、同じ志を持っているのですから、助け合いませんか？」

これ以上、犠牲は払いたくないんです

壁にもたれている彼らの中で 一番 主人名であるつ首の高い若者が、前へと進み出してきて 頭を下げる。

ナティアは、それを田の辺たりにして ハツとしたよつて、急いで兄に視線を向ける。

コウリイは、ただ微笑むだけで 何も言わない。

けれど 他の知らされていなかつた面々も、何かを悟つたのか 顔を見合わせている。

「あの廃村へ向かわれるのですね？」

ミコアムは、哀しげな表情を浮かべたまま言った。

その声色を聞いて、侍女や側近達は、息を呑んでしまった。  
この空間に漂っている空氣は、それだけ 繁迫してしまつてゐる  
だから。

そんな周囲の思いを知つてかしらすか ベットに倒れ込んだままの  
夢げな女性は、目の前に立つてゐる夫を見据えている。

「ああ 確固たる証拠があるわけじゃない。

だけど……何もないという証拠もないんだ」

珍しく真剣な眼差しを向けてくるコウロイに 王妃は、ただそれを  
見つめているだけだ。

しばらくの間、沈黙が続き ニコアムは、ゆっくりと身体を起した。

周囲にいる者は、ハッとしたように 田を見張る。

皆が息を呑んでいた中 王妃は、首に下さっていたモヘを取り出し、囁くような声を発した。

「(ノ)無事な」帰還を心より願つておつます。

「わたくしの心は 貴方の命」

高い声が、凜として部屋の中に響くと ニコアムは、薔薇の形をした石に口付ける。

すると 王妃の体全体が、光に包み込まれた。

これは、神聖なる儀式。

戦いの場に赴く前 夫たる者の命を支える者の誓い。

「別に 戦争に向かうわけじゃないのに」

心配そうに呟くゴウリイに ニコアムは、手を組める。

「それでも 危険な場所でしょ?」

あそこは、始まりの場所であって 悲しみが続く場所でもある」

真剣な瞳を持つ妻に 男は、肩を竦めてしまつ。

「リーンが、そこで拘束されている可能性も高い。

シャルロッテもだ。

侯爵に、城を離れている間 滞在してもりおかしが思つてゐる

「お父様が、呼ばれるの。

ならば 尚更……厄介なことが待つてゐるのですね?」

聰い王妃の発言に 王の側近達は、顔を見合わせてしまつてゐるようだ。

少し前にその話を聞いていた侍女達も、戸惑いを隠せていない。

「大丈夫ですよ、王妃様。

皆さん 無事に戻られますから」

1人の侍女が、ニッコリと微笑を浮かべて 膝をつき 断言した。

「貴女は…………？」

見かけない銀髪の女性に ミリアムは、首を傾げる。

顔立ちは、誰かを連想させるような気もするが なぜかわからない。

「ジャンヌの申します。

王と皆さんが、王宮を離れている間 王妃様方のお側に仕えさせて  
頂きます」

「話によれば 武術にも医術にも長けているらしい。

侍女としてならば シャーリー達もいるだろつから…………ナディア  
の助手になつてもうおつと思つんだが」

「ウーリィは、そう言つて 黙り込んだままの妹に視線を向いた。

「知識の方には、問題ないからね?  
もう一人の彼女は、シャーリーの部下として 女見習いをするこ  
とになつてゐるわ」

妹殿下の言葉を受けて メイド服姿の幼顔の少女が、チヨコチヨコ  
と進み出でくる。

「初めまして…… イブと申します。

何かどじ迷惑にならないよう 頑張りますからあツー！」

間延びな口調に 先輩侍女のシャーリーは、頭を抱えているし ル  
チアは、既に呆れ顔だ。

「何だか 楽しそうだわ？」

「アンとも仲良くなれるんじやないかしらね？」

その言葉に ルチアは、” それでもないんですよ ” と 息をつく。

「性格<sup>キャラ</sup>が被ると 勉強てしまつてゐるんですから。

仕事だから 仕方がないところの……あの子にも、困ったもの  
です」

侍女頭の言葉を受けて ミリアムは、口々口々と笑う。

そんな妻の様子を見て ゴウリイは、安堵したように胸を撫で下ろす。

「陛下……今からお出立になられるのですよね？」

お見送りができず 申し訳ござりません」

「いや……謝らないで欲しい。  
ミリアムは、どこか哀しげに 夫である王に視線を戻した。

ミリアムも、無理せずに 健やかに過ごして欲しいから

ゴウリイは、一ヶコリと優しげな眼差しを持つて 王妃の頬に触れる。

そんな夫婦の姿を見つめて 周囲の皆は、何とも言えない様子。

特に 年若い面々は、頬を赤らめてしまつていいよつだ。

「それでは……用意がありますので 退室させて頂きますね？」

イリアは、咳払いしながら 身重な妻の手を引き 部屋を後にする。

その後に 皆も、置いていくなと言わんばかりに 出で行った。

部屋の中に取り残された王と王妃は、苦笑しながら 互いの顔を見つめ合ひ。

## 出立

「ゴウリイ…………無事に帰ってきてくださいね？」

必ず…………必ずですッ！」

ミリアムの言葉に、王は、無言のまま頷いた。

そして、彼を伴った一団は、城を後にする。

後に残された面々は、何かを願つようにして、その姿が見えなくなるまで、見つめていた。

「大丈夫ですよ、ミリアム王妃。

王は、必ず、帰られます。

勿論、貴女の大切な友人のリーン嬢も、一緒に

その言葉に、王妃は、涙を流したままの顔を上げて、頷く。

「ありがとう…………その言葉は、何よりも、わたくしの心の励みに

なるわ？」

涙を拭いながら ミリアムは、微笑んだ。

「それでは、そろそろ お部屋に戻りましょう。

お体に 觸ります」

シャーリーは、そう言つと ショールを 王妃にかける。

そして 他の侍女達に指示をする ルチアに視線を送り そのまま  
建物の中へと入つていった。

「彼方方は、こちらに来ていただきます。

お部屋の方も 用意しておりますので 着替えてください

侍女頭の言葉に ジャンヌトイヴは、背筋を伸ばす。

「我々の話を、全て 信じてくださつてゐるわけでは、ないという  
ことでしううか。

確かに 信じられない 内容かもしだせませんけど……」

ジャンヌは、別室に案内されて、田を細めた。

逆に、イヴの方は、城の中での当たらない場所だとこいつて『『『』』』  
が付いていないのか、ビームか、ひやいでこるらしい。

「確かに、その通りです。

けれど、それと同時に……、符合する事柄を、理解しているつもり  
です。

わたくし達の務めは、ミコアム様を精神的にも、身体的にも、お守  
りする」と。

あの方は、ずっと、辛い思いをして参りました。

今、ミリアム様のお心を支えて、下への愛なので、

「ルチア様の気持ちは、お察しします。

我々にも、命を賭けて、お守りしたいと思つ方がありますから」

「やあですよーー？」

主を想つ氣持ちは、同じなんですか？」

2人の真剣な眼差しに ルチアは、息を呑んだ。

彼女が、口を開こうとした時 部屋の扉が、勢いよく 開いた。

「「「ルチア様！！！」」

3人は、あまり 見知られた侍女ではないが 申し分のない仕事をこなす 新米の侍女の3人娘だ。

彼女達は、上級貴族の娘達だが 他の傲慢な令嬢達とは、違い 礼儀を弁えている。

敢えて 問題を指摘するならば 身分に關係なく人に接する事と素直すぎるということだろう。

思つたことを、そのまま 口に出してしまうことも多々あり 助かることの反面 面倒に巻き込まれることも、少なくない。

「一体 どうしたというのです。

3人共 落ち着きなさい。

王宮侍女なのですか？

年配の侍女頭は、動じぬこともなく 落ち着きを払つてゐる。

「ハローズ、お部屋の掃除をしていたんですね？」

「そうしたら、突然、声が聞こえて……」

「声の聞こえる方も振り向いてみたら……」

「ハローズ、ちやんが、田を覚ましたんですね？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3494m/>

---

硝子の薔薇

2011年1月21日08時37分発行